

指宿市埋蔵文化財発掘調査報告書第42集

株式会社エヌ・ティ・ティ・ドコモ九州  
携帯電話無線基地局建設に伴う発掘調査報告書

しん ぼん しょ うしろ  
新番所後遺跡Ⅱ

平成19年9月  
指宿市教育委員会



## 例 言

1. 本書は、平成19年4月2日から平成19年5月22日まで実施した鹿児島県指宿市に所在する新番所後遺跡の発掘調査報告書である。
2. 発掘調査は、株式会社エヌ・ティ・ティ・ドコモ九州と指宿市とが発掘調査業務委託契約を締結し、指宿市教育委員会で実施した。調査は中摩浩太郎が担当し、渡部徹也・鎌田洋昭の協力を得た。調査組織は以下のとおりである。

発掘調査主体	指宿市教育委員会		
発掘調査責任者	指宿市教育委員会	教 育 長	田 中 民 也
発掘調査担当組織員	指宿市教育委員会	教 育 部 長	屋 代 和 雄
		社 会 教 育 課 長	中 間 竜 郎
		社 会 教 育 係 長	川 路 潔
		社 会 教 育 係 主 査	東 中 川 睦 子
		社 会 教 育 係 主 事	岩 松 友 美
		社 会 教 育 係 主 査	宮 地 主 悦
		同 上	西 村 陽 一 郎
		文 化 係 主 幹 係 長	西 野 実
		文 化 係 主 事	吹 留 義 輝
		文 化 係 非 常 勤	鎌 田 真 由 美
		文 化 財 係 主 幹 係 長	下 玉 利 泉
発掘調査・報告書作成担当		文 化 財 係 主 査	中 摩 浩 太 郎
		同 上	渡 部 徹 也
		同 上	鎌 田 洋 昭

### 発掘調査・整理作業員

堀口ツユ子、片平健一、井上ヒサ子、東 富子、下拂喜代志、吉満淳子、折田孝善、高田正明、  
吉元まり子、濱田文男、清 秀子、竹下珠代、富宿富美子、大谷宏子

3. 本書の編集、図面作成、写真撮影は、中摩浩太郎が行った。
4. 調査、及び報告書作成に要した経費は(株)エヌ・ティ・ティ・ドコモ九州が全額負担した。
5. 本報告書のレベルは、全て絶対高である。図中に用いられている座標値は、国土座標系第Ⅱ系に準ずる。
6. 遺物観察表、遺物実測図、遺構図の表記凡例は、『橋牟礼川遺跡』Ⅲ（1992、指宿市教育委員会）と『水迫遺跡Ⅰ』（2000、指宿市教育委員会）に準ずる。観察表の特殊な表記については下記のとおりである。

土器の混和剤【カ：角閃石、セ：石英、ウ：雲母、金：金雲母、白：白色粒、黒：黒色粒、赤：赤色粒】

土器部位・法量【口：口縁部、口縁部径、肩：肩部、肩部最大径、胴：胴部、胴部最大径、底：底部、底部径】

調整【内：内面、外：外面、口唇：口唇部、突：突帯部、底：底面、脚内：脚台内面、脚端：脚台接地面】

色調【内：内面、外：外面、肉：器肉】※地層・遺物のマンセル値は、土色計SCR-1を使用し測色した。

7. 発掘調査で得た全ての成果については、指宿市考古博物館時遊館COCCOはしむれで保管し、活用する。

## 本文目次

第1章 経緯と調査概要	1
第1節 遺跡の位置と環境	1
第2節 確認調査に至る経緯と調査の概要	1
第3節 本格調査に至る経緯と調査の概要	2
第2章 遺跡の層序	5
第3章 調査の成果	10
第1節 古代	10
第2節 古墳時代	15
第3節 弥生時代	20
第4章 まとめ	31

## 挿図・表目次

第1図 調査地点図1	1
第2図 調査地点図2	2
第3図 調査地点図3	3
第4図 確認調査概要図	4
第5図 南・東壁層位断面図	6
第6図 南東壁層位断面図	7
第7図 中央ベルト層位断面図	8
第8図 層位模式柱状図	9
第9図 古代の遺構配置図	10
第10図 古代（6層中）道跡配置図	11
第11図 古代道跡平面図・断面図1	12
第12図 古代道跡平面図・断面図2	13
第13図 古代ピット1平面図・断面図	14
第14図 古代（第6層中）炭化物出土状況図	14
第15図 9層上面（青コラ火山灰下）の地形図	15
第16図 古墳時代（第8層中）遺物出土状況図	16
第17図 第8層中炭化物出土状況図	17
第18図 古墳時代（第9層中）遺物出土状況図	18
第19図 古墳時代（第8・9層中）出土遺物実測図	19
第20図 第12層a上面（暗紫コラ直下）の地形図	20
第21図 弥生時代火山灰（km7またはkm8）直下の地形	21
第22図 弥生時代遺構配置図	22
第23図 弥生時代ピット平面図・断面図	24
第24図 弥生時代ピット平面図・断面図、土坑実測図	25
第25図 弥生時代（第10層中）出土遺物実測図	26
第26図 弥生時代（第10層中）遺物出土状況図	27
第27図 弥生時代（第12層）遺物出土状況図	28
第28図 弥生時代（第12層）出土遺物実測図	29
第29図 弥生時代（第12層b）出土骨片実測図	30
表1 硬化面1中山式土壌硬度計測定データ	12
表2 硬化面1中山式土壌硬度計測定データ	12
表3 硬化面3中山式土壌硬度計測定データ	12
表4 硬化面2中山式土壌硬度計測定データ	12
表5 硬化面4中山式土壌硬度計測定データ	13
表6 硬化面5中山式土壌硬度計測定データ	13
表7 硬化面6中山式土壌硬度計測定データ	13
表8 遺物観察表	30

## 写真目次

写真1 指宿市全景	32
写真2 東壁層位	32
写真3 南東壁上段層位	32
写真4 南東壁下段層位	32
写真5 南壁層位	32
写真6 中央ベルト層位	33
写真7 先行トレンチ層位	33
写真8 古代遺構面調査状況	33
写真9 古道検出状況	33
写真10 硬化面1	33
写真11 硬化面1断面	33
写真12 硬化面2	33
写真13 硬化面2断面	33
写真14 硬化面3	34
写真15 硬化面3断面	34
写真16 硬化面4	34
写真17 硬化面4断面	34
写真18 硬化面5	34
写真19 硬化面5断面	34
写真20 硬化面6	34
写真21 硬化面6断面	34
写真22 古代ピット1	35
写真23 古墳時代（第9層）遺物出土状況	35
写真24 古墳時代（第8層）炭化物出土状況	35
写真25 弥生時代包含層調査状況	35
写真26 弥生時代ピット2	35
写真27 弥生時代ピット3	35
写真28 弥生時代ピット4	35
写真29 弥生時代ピット5	35
写真30 弥生時代ピット6	36
写真31 弥生時代ピット7	36
写真32 弥生時代ピット12	36
写真33 弥生時代ピット13	36
写真34 弥生時代ピット14	36
写真35 弥生時代ピット15	36
写真36 弥生時代ピット16・17	36
写真37 弥生時代ピット18	36
写真38 弥生時代土坑検出状況	37
写真39 弥生時代土坑断面	37
写真40 弥生時代土坑完掘状況	37
写真41 弥生時代（第10層）遺物出土状況	37
写真42 弥生時代（第12層d）遺物出土状況	37
写真43 完掘全景	37
写真44 試掘トレンチ1	37
写真45 試掘トレンチ2	37
写真46～写真51 古墳時代（第8層・第9層）出土遺物	38
写真52～写真53 弥生時代（第10層）出土遺物	38
写真54～写真56 弥生時代（第12層）出土遺物	38

# 第1章 経緯と調査概要

## 第1節 遺跡の位置と環境

指宿市は、薩摩半島の南端に位置する。地形的には、山地、台地、平野、湖沼の4つに大別される。中でも九州最大のカルデラ湖である池田湖は、約5,500年前に噴火し、その噴出物は厚く指宿地方を覆い、本市の地形形成の大きな要因となっている。

また、南西にある開聞岳も、縄文後期に活動を開始して以来噴火を繰り返していた。指宿市内の各地で、黄コラ（縄文時代後期）、暗紫コラ（弥生時代中期）、青コラ（7世紀第4四半期）、紫コラ（西暦874年3月25日）などの噴出物が確認され、国指定史跡指宿橋牟礼川遺跡は紫コラによる火山災害遺跡としても知られている。

新番所後遺跡は、指宿市十二町字尻垂ノ上に位置する。遺跡は、西方にある鰻池マールの外壁をなす標高約280mの山から緩やかに下りてきた山裾、標高50m前後の緩傾斜地に立地し、付近には橋牟礼川や山王川などの小河川が流れている。北方約0.5kmには国指定史跡指宿橋牟礼川遺跡が、南に約1kmの地点には成川遺跡があるなど周辺にも多くの遺跡が確認されている。

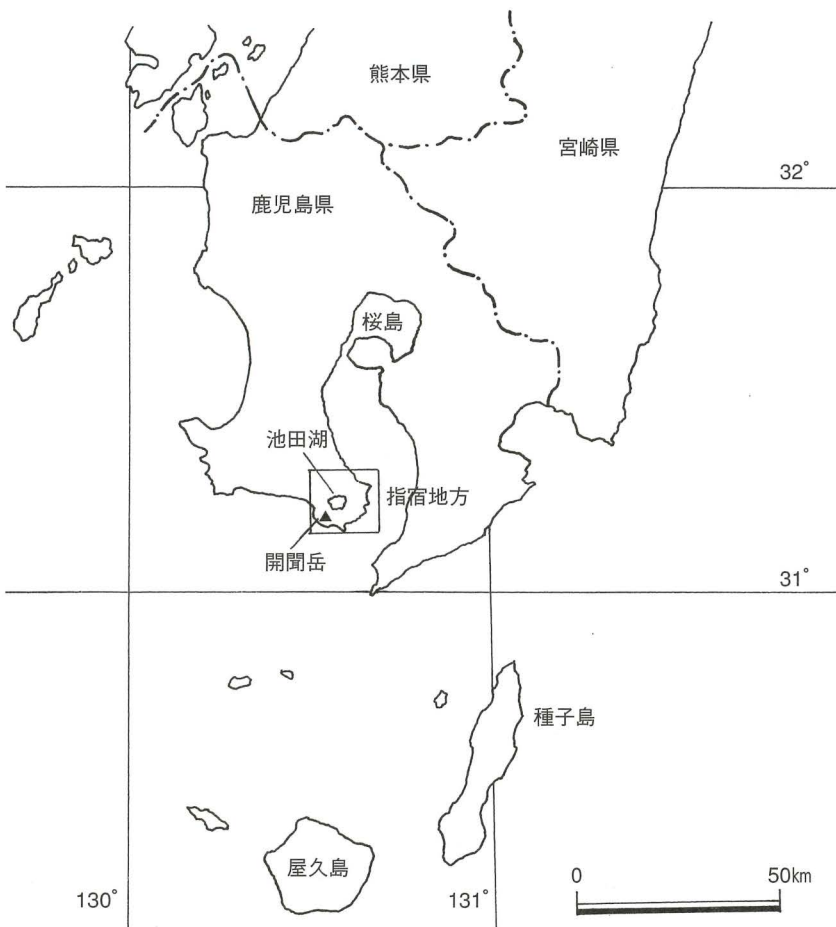
新番所後遺跡は、昭和49年に鹿児島県によって、指宿養護学校建設に伴い初めて発掘調査が行われ、弥生時代から古墳時代にかけての遺物が出土した<sup>(1)</sup>。その後、平成4年に行われた指宿国立病院職員官舎建設工事に伴う発掘調査では、縄文時代晩期から古墳時代にかけての遺物が出土している<sup>(2)</sup>。縄文時代晩期の遺物には、上加世田式、入佐式、黒川式、刻目突帯文などの数時期の土器をはじめ、扁平打製石斧、磨製石斧、石皿、叩石等良好な資料が得られている（以上『新番所後遺跡』指宿市教育委員会 2007より転載）。

そして、平成18年度に行われた(株)ニシムタ店舗建設に伴う発掘調査では、埋没した小規模な谷地形部分の調査を実施し、縄文時代晩期の刻目突帯文土器・打製石斧、弥生時代のピット群を検出し、前期の高橋式土器、中期の入来式土器・扁平片刃石斧・軽石製加工品などが出土、古墳時代の成川式土器・竪穴住居1軒を確認した<sup>(3)</sup>。

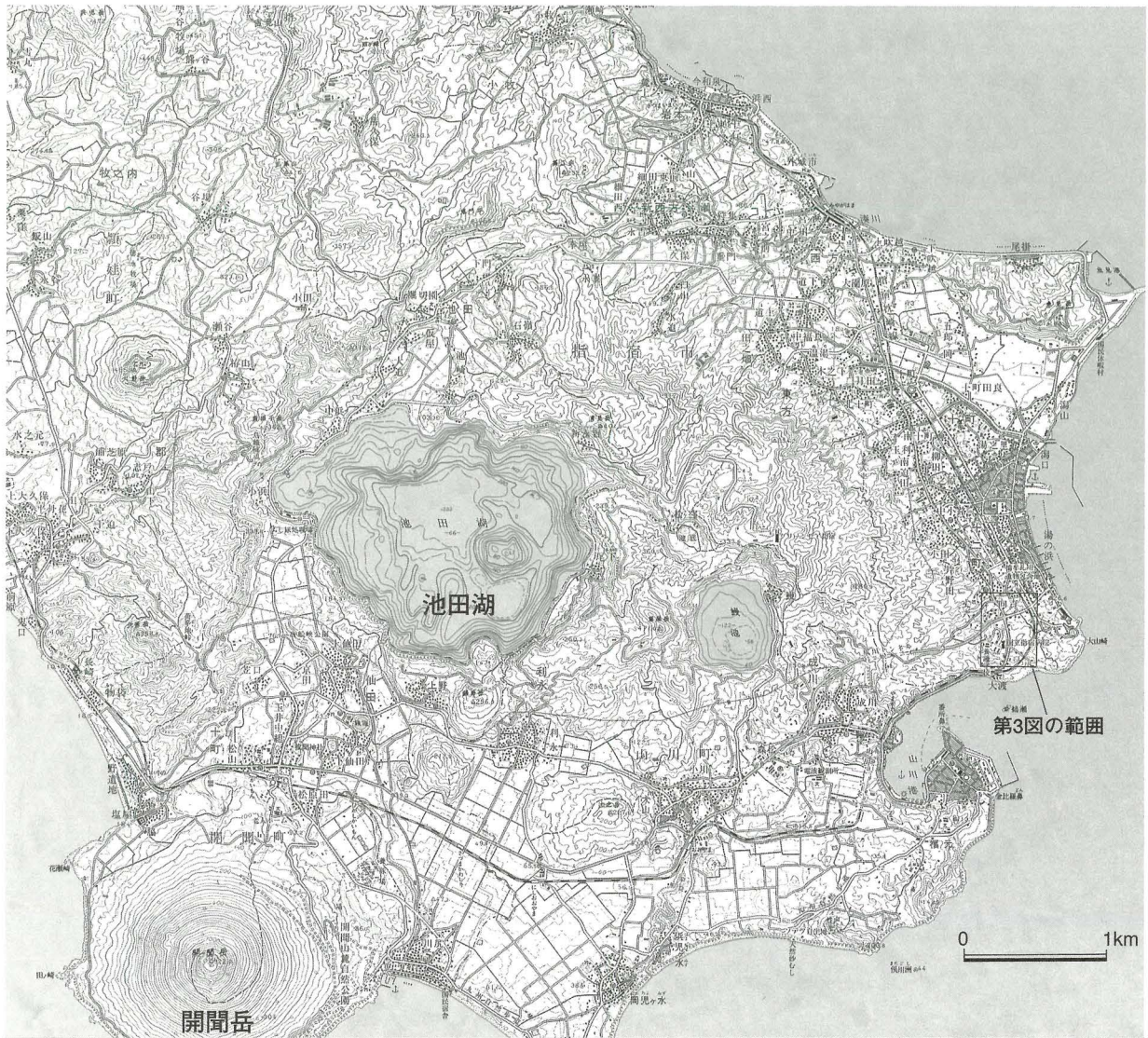
(1) 『新番所後遺跡』鹿児島県教育委員会 1985

(2) 『新番所後遺跡Ⅱ』鹿児島県教育委員会 1992

(3) 『新番所後遺跡』指宿市教育委員会 2007



第1図 調査地点図1



第2図 調査地点図2

## 第2節 確認調査に至る経緯と調査の概要

平成18年7月27日、株式会社エヌ・ティ・ティ・ドコモ九州より、指宿市十二町字久保崎ノ上4083番地2での携帯電話無線基地局の建設計画に伴い、「周知の遺跡地における土木工事等の届出」(93条)の提出があり、遺跡の有無についての照会があった。鹿児島県文化財課の指導に基づき、遺跡の有無とその詳細を把握するために、工事予定地について2ヶ所のトレンチを設け確認調査を実施した。調査の概要は、下記のとおりである。

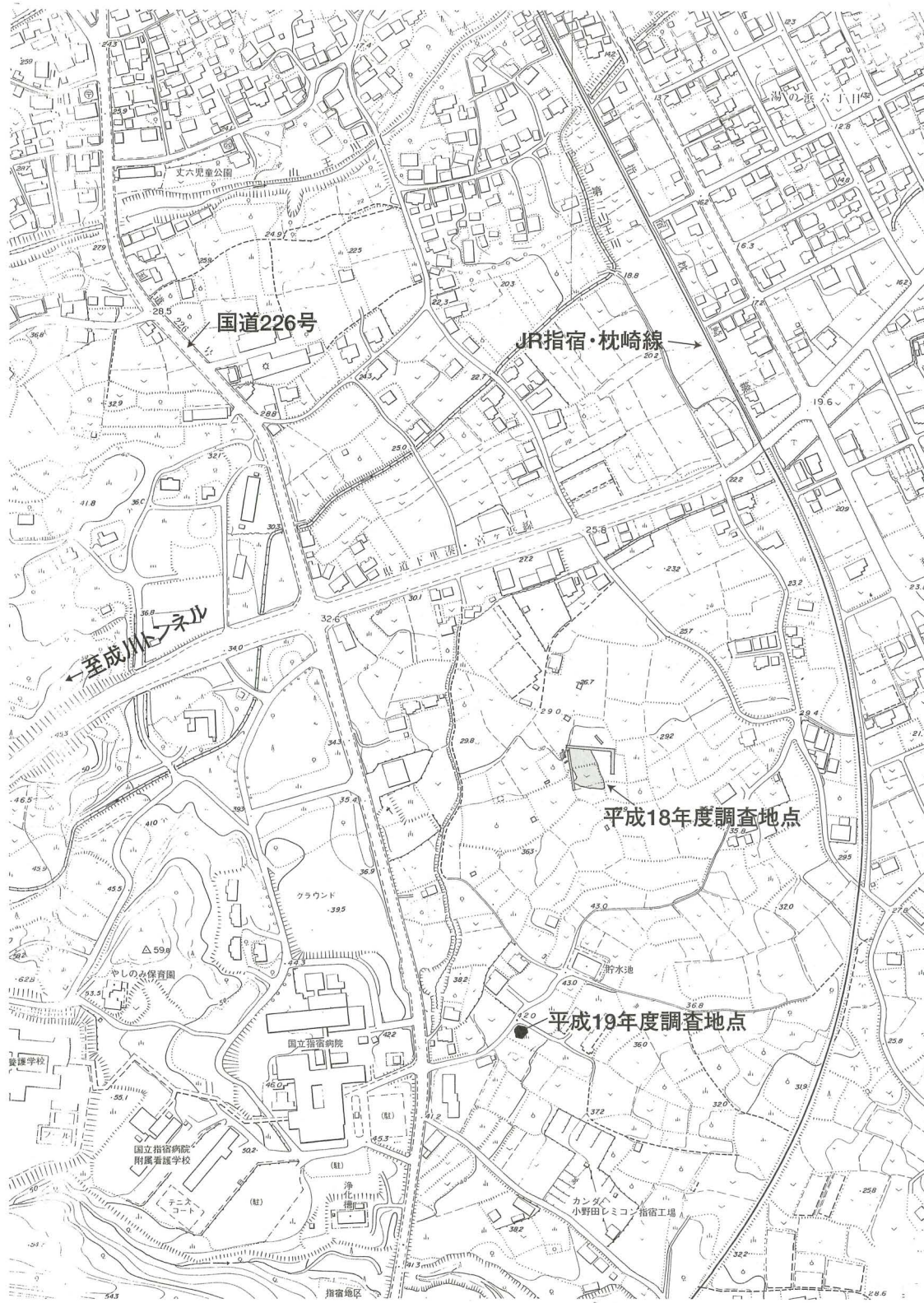
■確認調査期間 平成18年9月1日

■調査面積 延べ7.5㎡

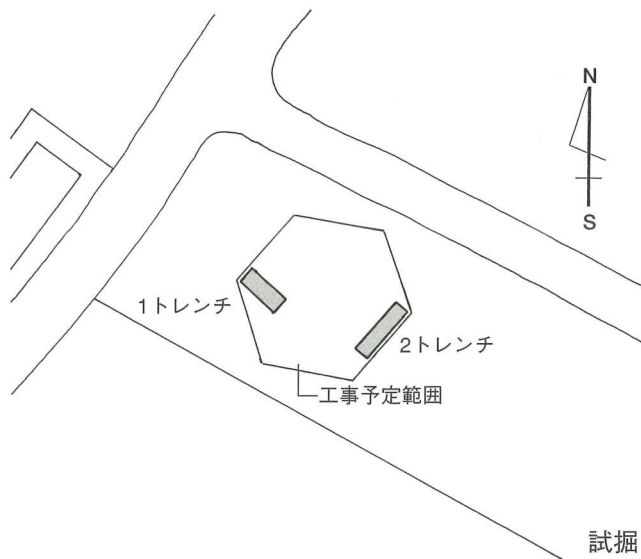
■調査担当 渡部徹也

確認調査の結果、1トレンチにおいて、地表面から約2mに達して試掘を実施したが、遺物遺構とも確認されなかった。一方、2トレンチにおいて、地表面から約1.8mから2.8mの範囲で遺物包含層を確認した。2トレンチでは、西暦874年と7世紀後半に堆積した開聞岳噴火起源の火山灰層が確認され、両火山灰層の下位に遺物包含層が現存し、西暦874年火山灰層下位では土師器が、7世紀後半の火山灰層下位では古墳時代の成川式土器が出土した。1・2トレンチの地層観察からは、調査地は北から南へ下る傾斜地であることが

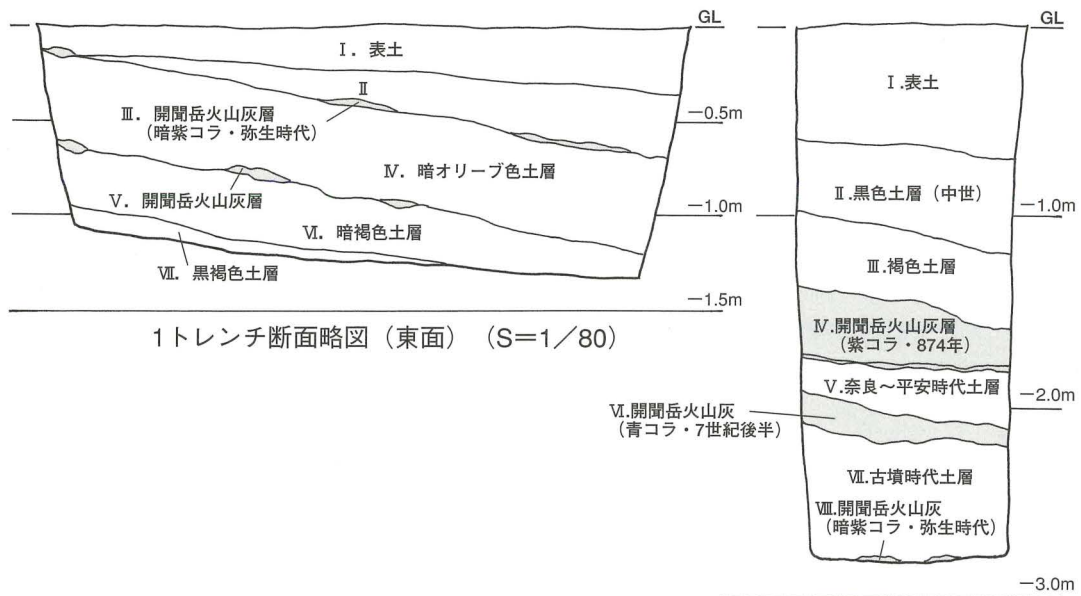
想定された。なお、1トレンチでは、弥生時代の降下火山灰層が2層確認されている。1・2トレンチの状況については、写真44・45を参照いただきたい。



第3図 調査地点図3



試掘トレンチ配置図 (S=1/500)



第4図 確認調査概要図



### 第3節 本格調査に至る経緯と調査の概要

確認調査の結果を受け、株式会社エヌ・ティ・ティ・ドコモ九州と協議を行った結果、平成19年度当初に本格調査を実施することとなった。これに基づき、株式会社エヌ・ティ・ティ・ドコモ九州から平成19年3月28日付けで発掘調査依頼書が提出された。以下本格調査の概要である。

■調査期間 平成19年4月2日～平成19年5月22日

■調査面積 96㎡

■調査担当 中摩浩太郎

調査に当たり、確認調査の結果に基づいて、まず旧地形を把握するために西暦874年の降下火山灰（紫コラ）上面を重機により掘削し露出させた。紫コラ上面は概ね北東方向から南西方向に向かい傾斜していた。引き続き紫コラを重機で除去し、874年面（6層上面）を作業員の手掘りで検出したが、橋牟礼川遺跡で見られるような、畠跡や道跡などの遺構は見られなかった。このため、6層を掘り下げ、7世紀後半の降下火山灰層（青コラ）を露出させる途中の6層中で、帯状の硬化面を検出した。

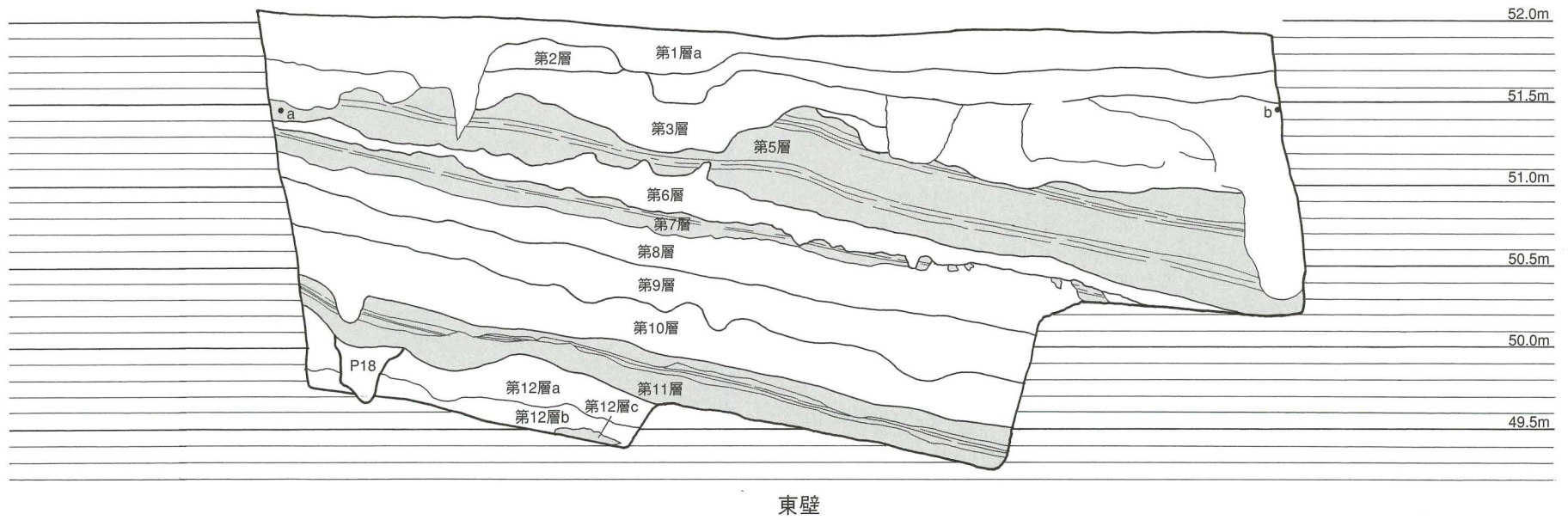
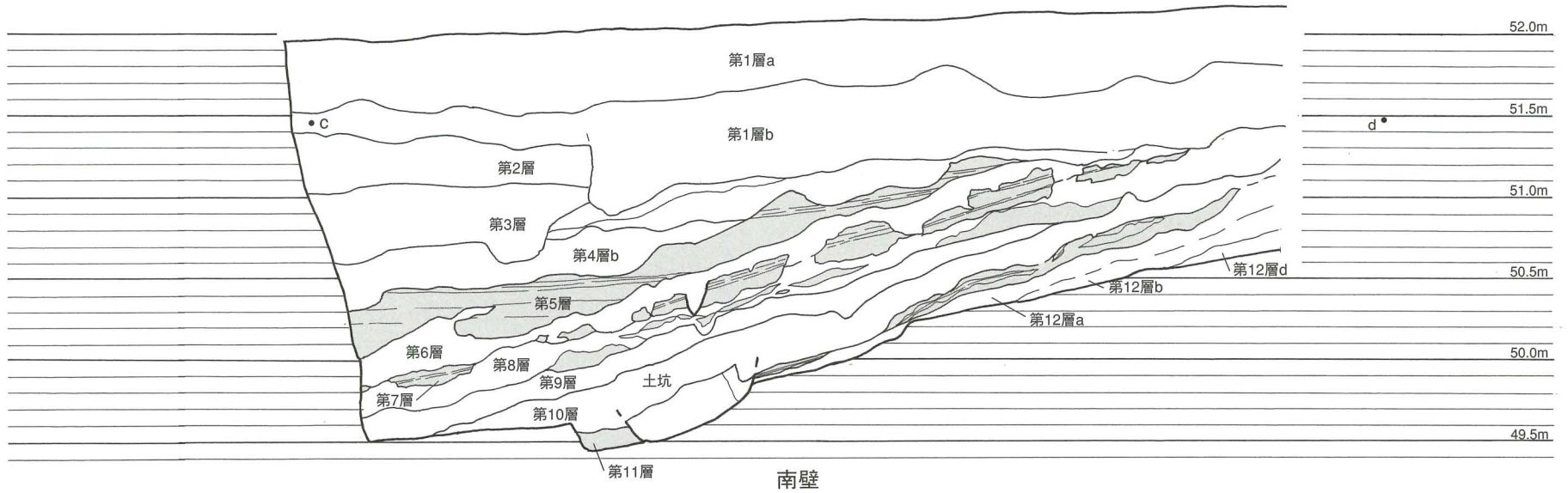
また、第7層青コラ上面と弥生時代中期の開聞岳降下火山灰層（第11層暗紫コラ）上面でそれぞれピットを検出した。古墳時代の遺物部包含層である第9層と、弥生時代の遺物包含層である第10層・第12層中に土器などの遺物が含まれていた。

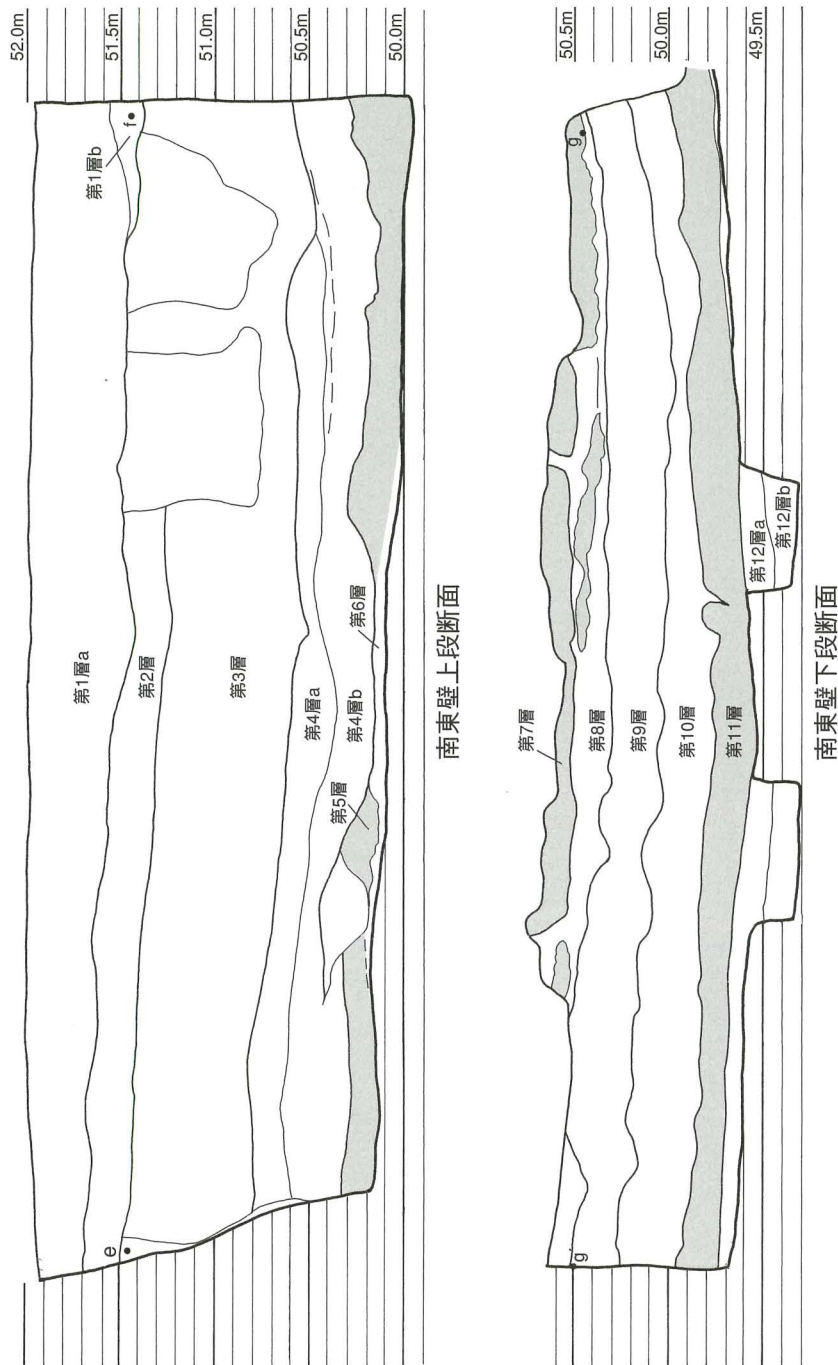
## 第2章 遺跡の層序

平成18年度に実施した新番所後遺跡の発掘調査成果から、同遺跡における層序基本的な堆積状況は、近接する橋牟礼川遺跡と同様であることが判明していた。このため、今回の調査においても橋牟礼川遺跡の基本層序に対比する形で層名を決定した。以下に今回の調査で確認した層について、橋牟礼川遺跡の基本層序と対比しながら記述する。

第1層 a		表土層
第1層 b		表土層
第2層	暗灰色土層	耕作土層
第3層	黒色土層	中世遺物包含層に相当
第4層 a	黒褐色土層	中世遺物包含層に相当
第4層 b	黒褐シルト質土層	中世遺物包含層に相当
第5層	紫色火山灰層（紫コラ）	西暦874年3月25日の開聞岳火山性噴出物堆積層
第6層	暗オリーブ褐色土層	奈良～平安時代の遺物包含層 層中で硬化面が検出された
第7層	青灰色火山灰層（青コラ）	7世紀後半の開聞岳火山性噴出物堆積層
第8層 a	暗褐色スコリア混土層	古墳時代の遺物包含層に相当 火山礫を多量に含む
第8層 b	灰色スコリア層	7世紀後半の開聞岳火山性噴出物堆積層 スコリアと火山灰が堆積する（前期ステージ）
第9層	暗褐色粘質土層	古墳時代の遺物包含層 小礫や軽石等を含む
第10層	褐色シルト質土	弥生時代中期後半以降の遺物包含層

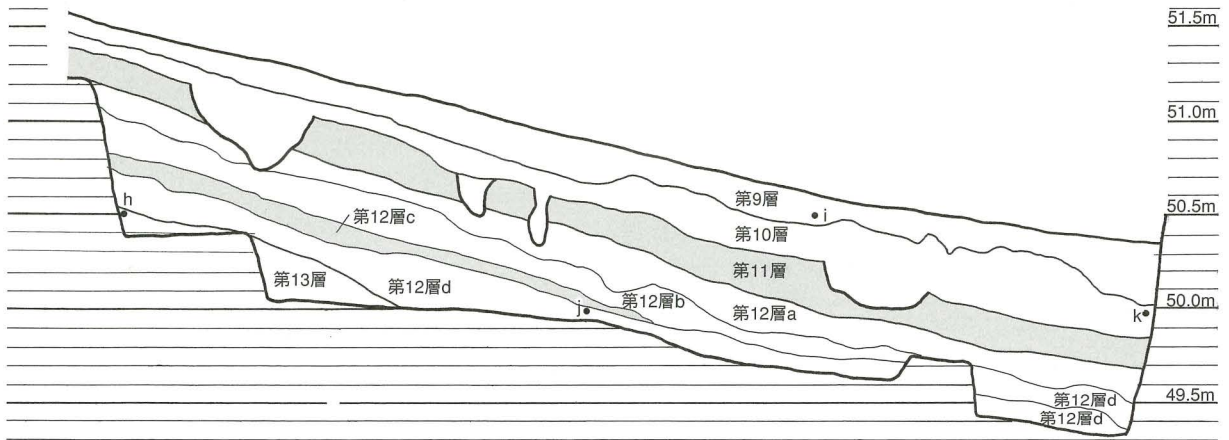
第5圖 南・東壁層位断面図 (S=1/40)



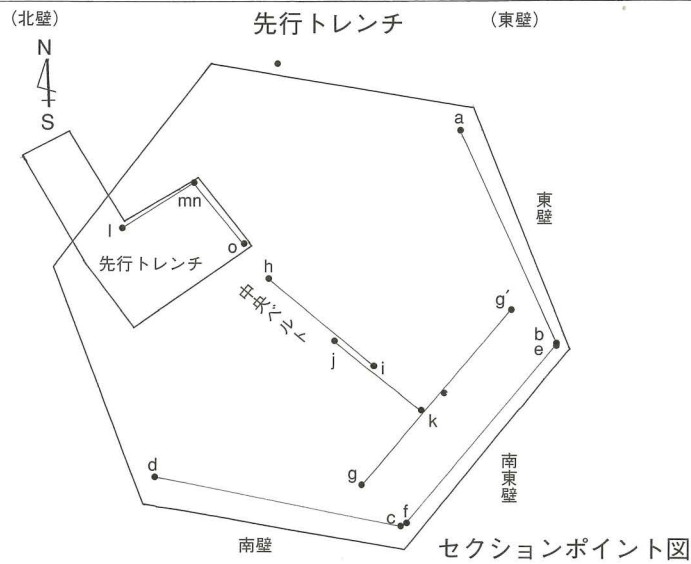
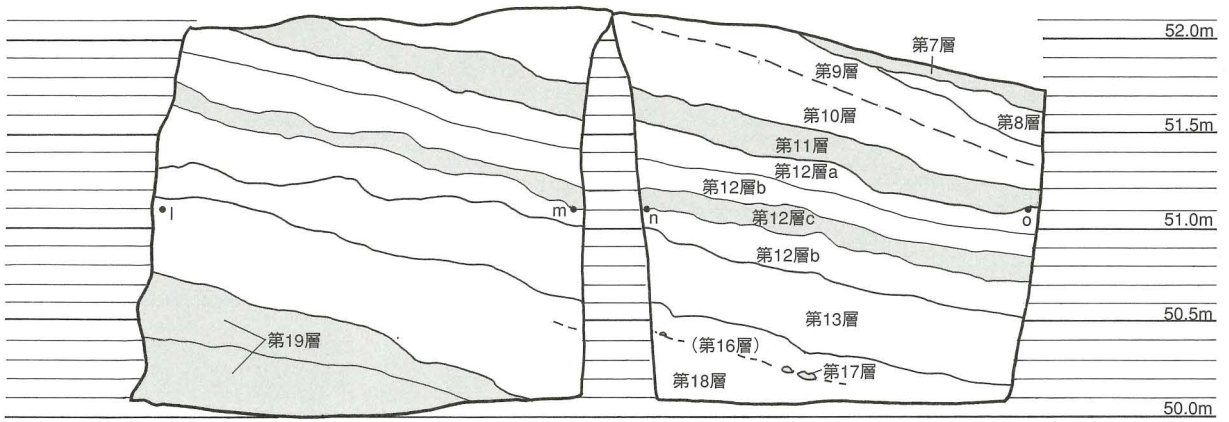


第6図 南東壁層位断面図 (S= 1/40)

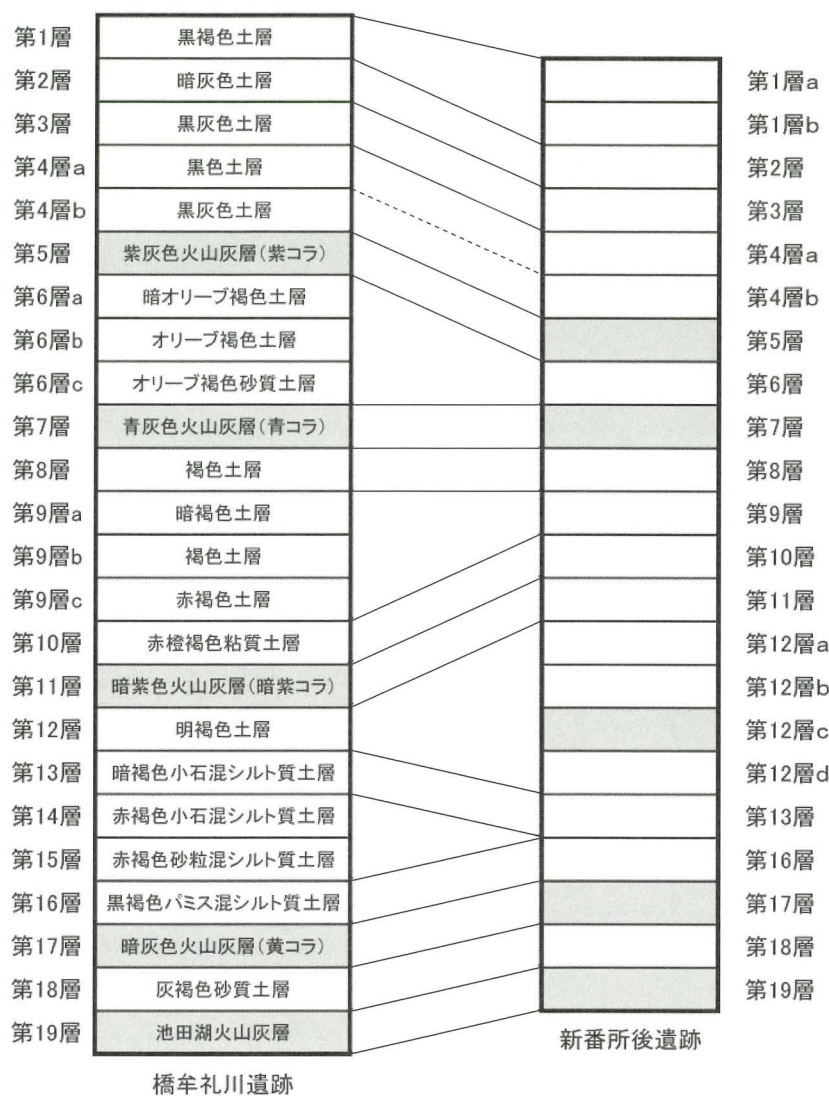
第11層	暗紫色火山灰層 (暗紫コラ)	弥生時代中期の開聞岳火山性噴出物堆積層 火山灰の状態から4層に細分され、上下は固結火山灰層である(下部はブロック状)。固結火山灰に挟まれる火山礫層は上部が粗粒、下部が細粒となる。
第12層 a	暗オリーブ褐色土層	弥生時代の遺物包含層
第12層 b	オリーブ褐色土層	弥生時代の遺物包含層
第12層 c	黒色火山礫層	弥生時代中期の開聞岳火山性噴出物堆積層
第12層 d	黒褐色粘質土層	弥生時代の遺物包含層



中央ベルト西壁



第7図 中央ベルト層位断面図 (S= 1/40)



第8図 層位模式柱状図

- |      |              |                     |
|------|--------------|---------------------|
| 第13層 | 黒色粘質土層       | 縄文晩期の遺物包含層に相当       |
| 第16層 | 褐色土層         | 縄文時代後・晩期の遺物包含層に相当   |
| 第17層 | 暗灰色火山灰層(黄コラ) | 縄文時代後期の開聞岳火山性噴出物堆積層 |
| 第18層 | 褐色土層         | 縄文時代後期の遺物包含層に相当     |
| 第19層 | 池田湖火山灰層      |                     |

今回の調査においては、第12層を4層に細分した。平成18年度の調査では、第12層中の火山灰堆積層を第12層a'としたが、今回はこれを第12層cとした。また、火山灰層上位の地層が土色の相違によって2分でき、それぞれ第12層aと第12層bとした。

新番所後遺跡と橋牟礼川遺跡の基本層序とは、概ね一致するが、平成18年度及び今回の調査によって、層の多少の違いも明らかになっている。具体的には、暗紫コラが厚く、固結部分と火山礫とが互層になっている状態が観察できること、そして暗紫コラの下位にもう一層火山灰層が確認できることである。

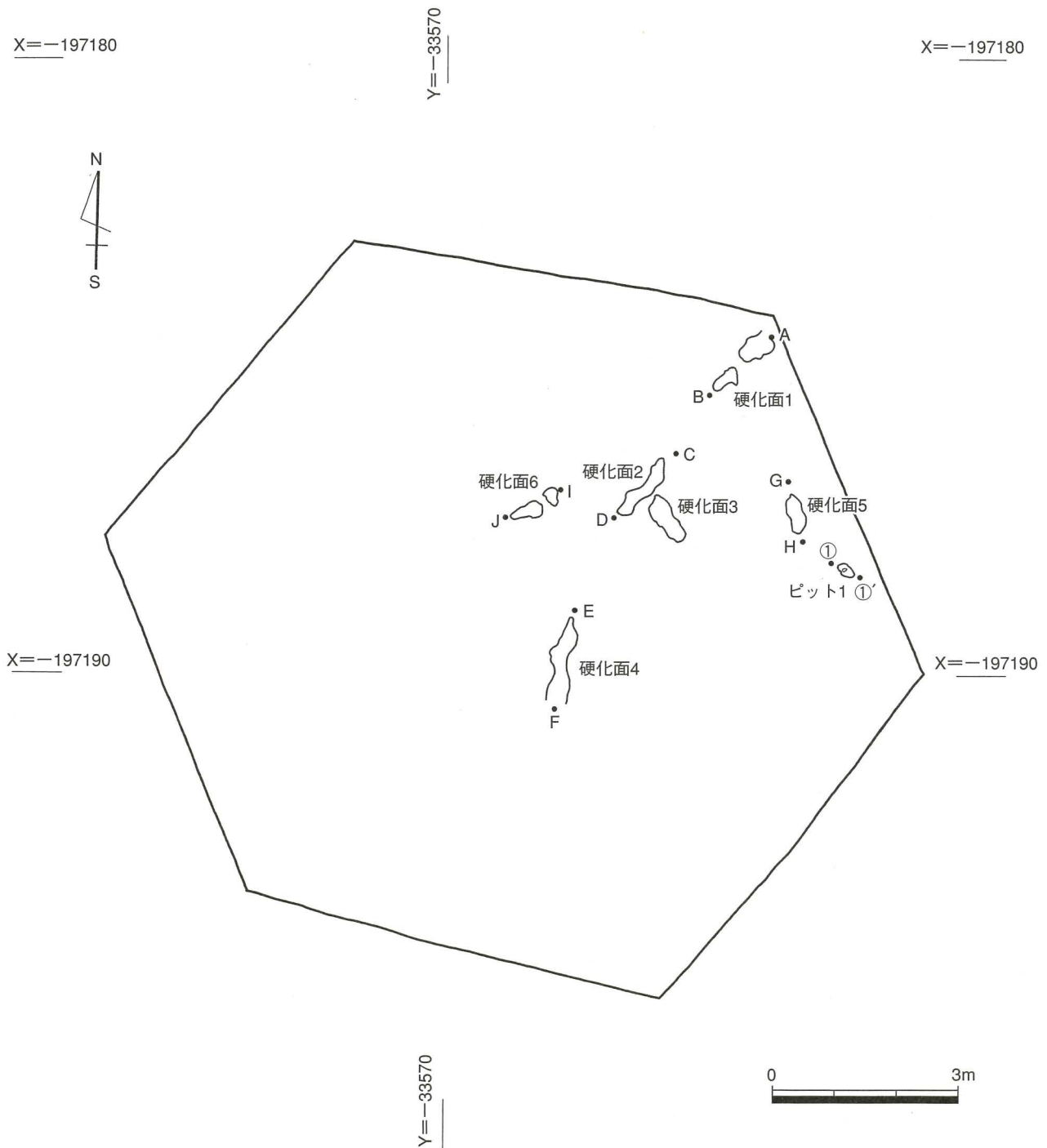
### 第3章 調査の成果

#### 第1節 古代

##### 1. 遺構について

##### 道跡（第10図・第11図・第12図）

西暦874年3月25日の降下火山灰（紫コラ）下位の第6層の掘削中に、硬化面が検出された。硬化面は25cmから40cm程度の幅で、調査区を南北に横切って延びるものと、これから枝分かれするものがあった。南北



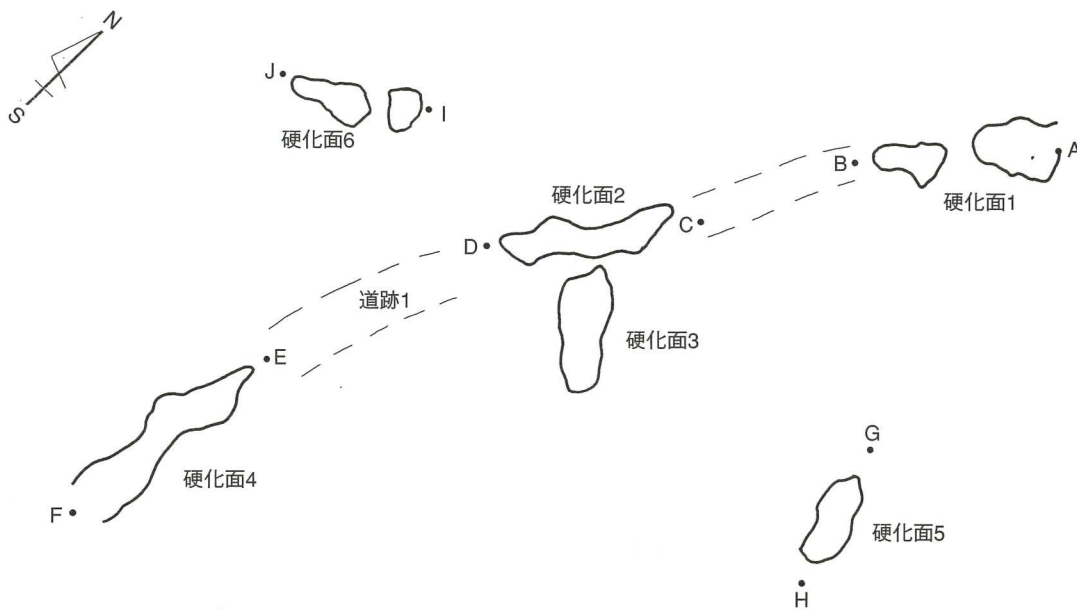
第9図 古代の遺構配置図 (S= 1 /100)

に伸びるものは斜面を斜めに下っている。検出層位から硬化面は、奈良～平安時代に帰属する。

道跡1は、硬化面1・2・4からなる。硬化面6は道跡1から傾斜面と平行し南西方向に分岐し、硬化面3は道跡1からほぼ直角に斜面下方向へ分岐し、硬化面5は道跡1から斜めに斜面下方向に分岐していた。

道跡は、掘り込みを持たず、厚さ1cm～2cm程度の硬化面のみで構成されている。硬化面はやや紫色を帯びた土色をしており、周囲の土壤に比べ小礫が多く含まれていた。硬化面については、中山式土壤硬度計を用い、表面硬度を計測した。その際、周辺土壤の硬度も合わせて計測し、対比資料とした。

調査区内で検出されたのは道跡の一部に過ぎないため、全体の配置状況を知ることはできないが、道跡1は北方向から南方向に丘陵斜面を斜めに下っているものであることが考えられる。現在、調査地点から直線距離で約400m南へ下ると海岸線に達するが、道跡1は海岸線に至る目的で設けられた可能性を指摘しておきたい。

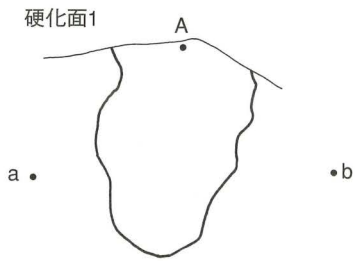


第10図 古代（6層中）道跡配置図（S=1/50）

6.53	27.82	12.27	11.48	5.68	19.63	12.88	10.9
3.83	12.39	44.7	8.85	24.01	20.95	21.86	13.36

a b

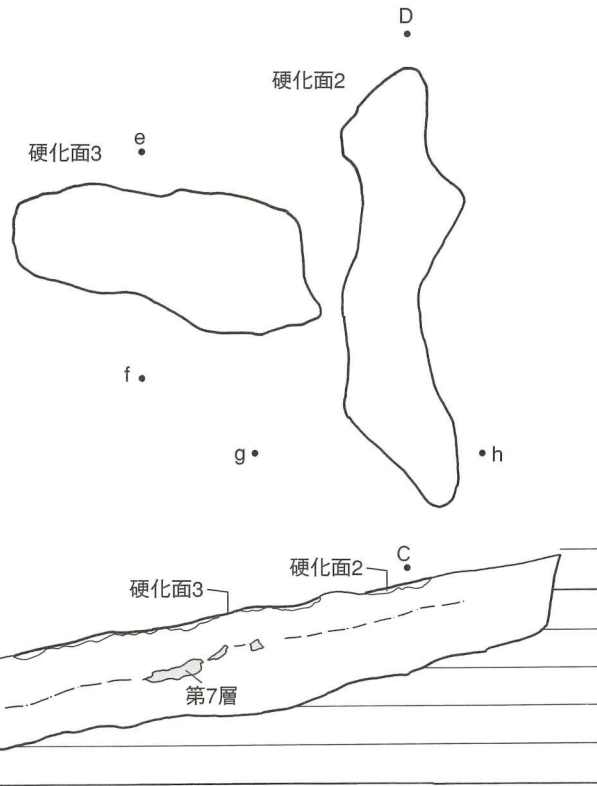
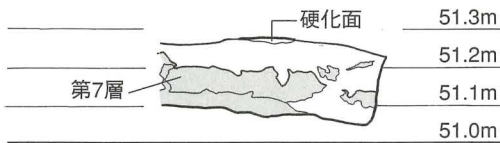
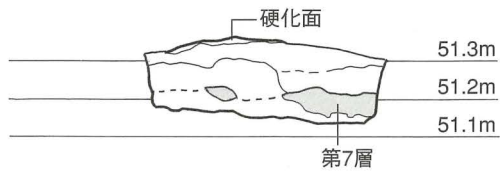
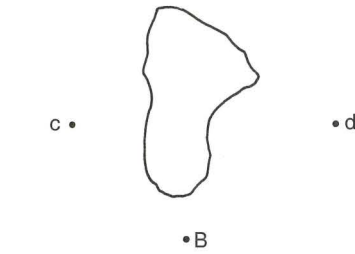
表1 硬化面1中山式土壤硬度計測定データ



1.84	6.09	15.24	32.82	20.4	26.79	9.75	11.29
14.02	12.66	16.73	25.77	30.77	12.72	17.08	8.35

c d

表2 硬化面1中山式土壤硬度計測定データ



8.9	26.11	26.79	22.99	17.47	13.42
8.81	22.12	20.96	17.5	11.92	16.43

e f

表3 硬化面3中山式土壤硬度計測定データ

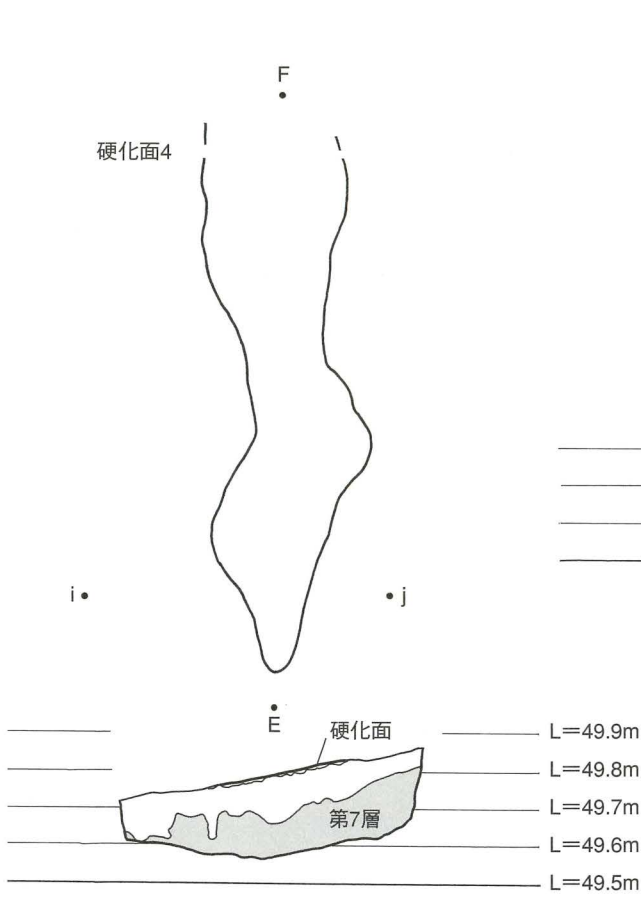
9.88	14.14	18.36	14.57	18.47	19.78
14.57	10.94	15.1	14.57	13.24	10.73

g h

表4 硬化面2中山式土壤硬度計測定データ

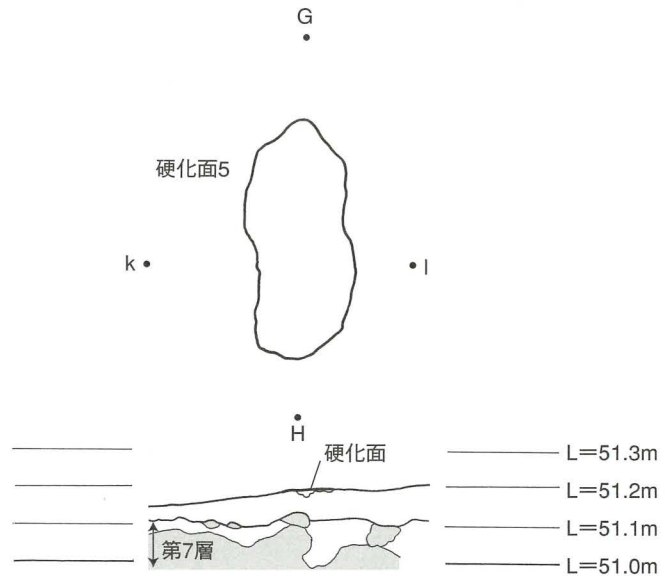
第11図 古代道跡平面図・断面図1 (S= 1/20)





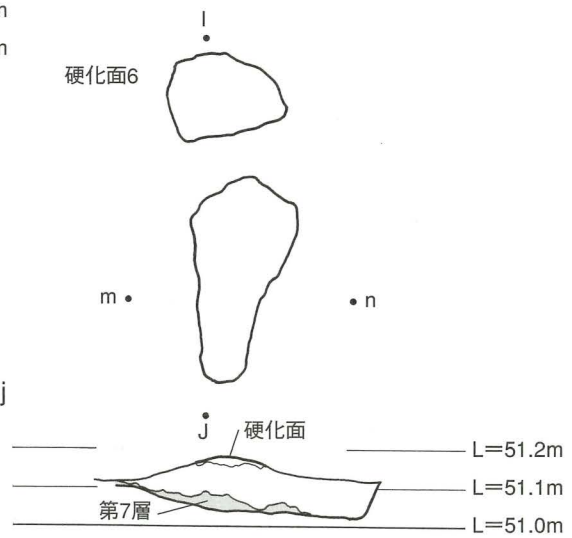
14.14	11.92	12.65	22.27	12.33	18.95	18.95	19.21
13.55	11.79	11.79	10.5	16.91	49.8	20.4	10.84
17.64	18.63	11.93	13.83	22.99	20.09	13.97	10.84

表5 硬化面4中山式土壤硬度計測定データ



8.37	10.11	14.14	15.3	22.3	15.55	17.21
16.22	19.49	18.36	18.9	21.54	24.89	13.58

表6 硬化面5中山式土壤硬度計測定データ



8.6	22.85	21.22	15.59	12.35	10.05
7.93	19.67	21.62	10.09	7.28	9.85

表7 硬化面6中山式土壤硬度計測定データ

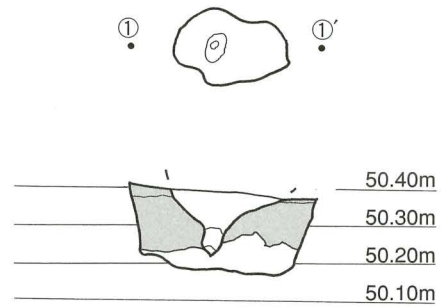
第12図 古代道跡平面図・断面図2 (S= 1 /20)

### ピット1 (第13図)

7世紀第4四半期の開聞岳の噴火は前期ステージと後期ステージの二つに分けられるが、新藩所後遺跡では、前期ステージを8層bとした。上位の8層aは土石流堆積物と言われ、橋牟礼川遺跡では軽石片を含むが、新藩所後遺跡では、層厚が薄く、火山礫を多数含んでいる。

7層青コラの固結火山灰層を除去し、前期ステージの火山礫上面を清掃した時点で、ピット1を検出した。

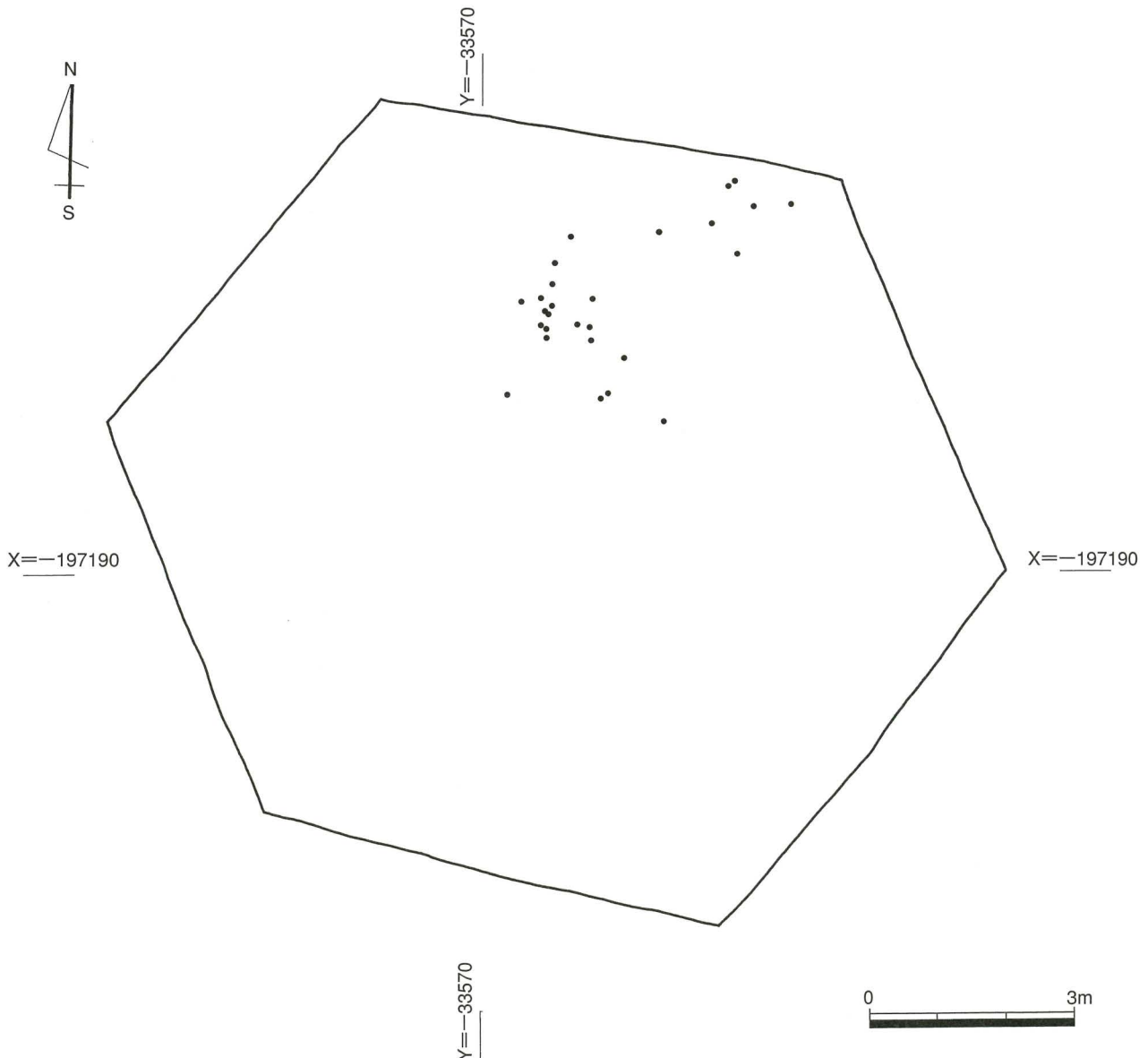
ピット埋土は、6層土に類似していることから、6層中からの掘り込みと見られる。長軸30cm・短軸20.5cmの楕円形を呈し、2段掘りになり、底部は9層土に達していた。



第13図 古代ピット1平面図・断面図 (S=1/20)

## 2. 遺物について

確認調査の際に第6層からは土師器片が出土したが、本調査においては土器などの遺物の出土は見られず、炭化物が分布していた (第14図)。

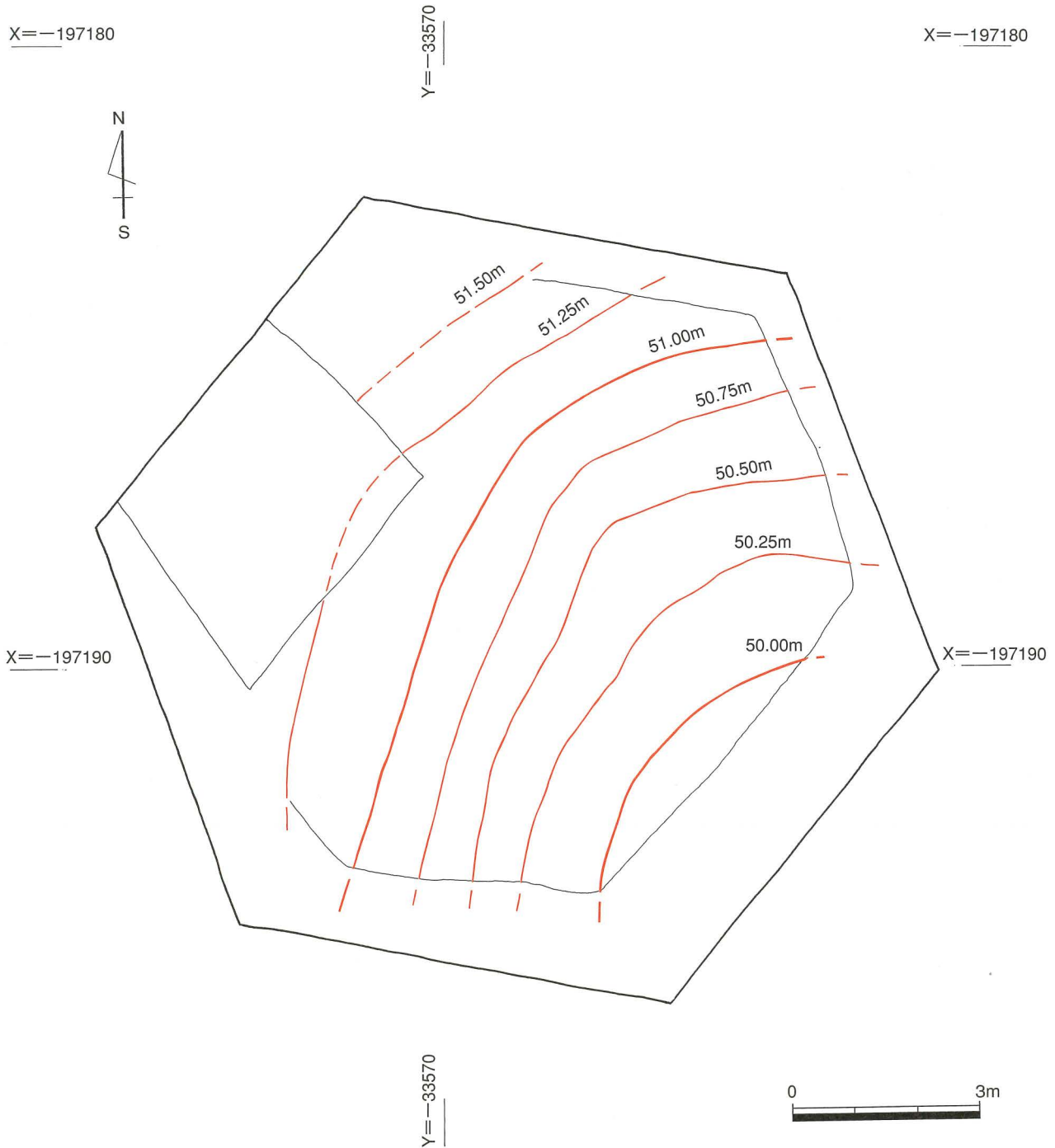


第14図 古代 (第6層中) 炭化物出土状況図 (S=1/100)

## 第2節 古墳時代

### 1. 青コラ直下の地形について (第15図)

調査地点は、国道226号線西側から海岸部に突き出た尾根状の地形の南側に位置する。現状の地形は耕作により平坦面に造成されている。青コラ火山灰の前期ステージの火山礫を含む第8層を除去した後、地形測量を実施した。これによると、現地は南側に向かう傾斜面であることがわかる。同時に、コンターラインが南西から東に向かってU字状に湾曲している。このことから、調査地点は尾根筋の幅が部分的に狭まる位置に当たることがわかる。



第15図 9層上面（青コラ火山灰下）の地形図 (S=1/100)

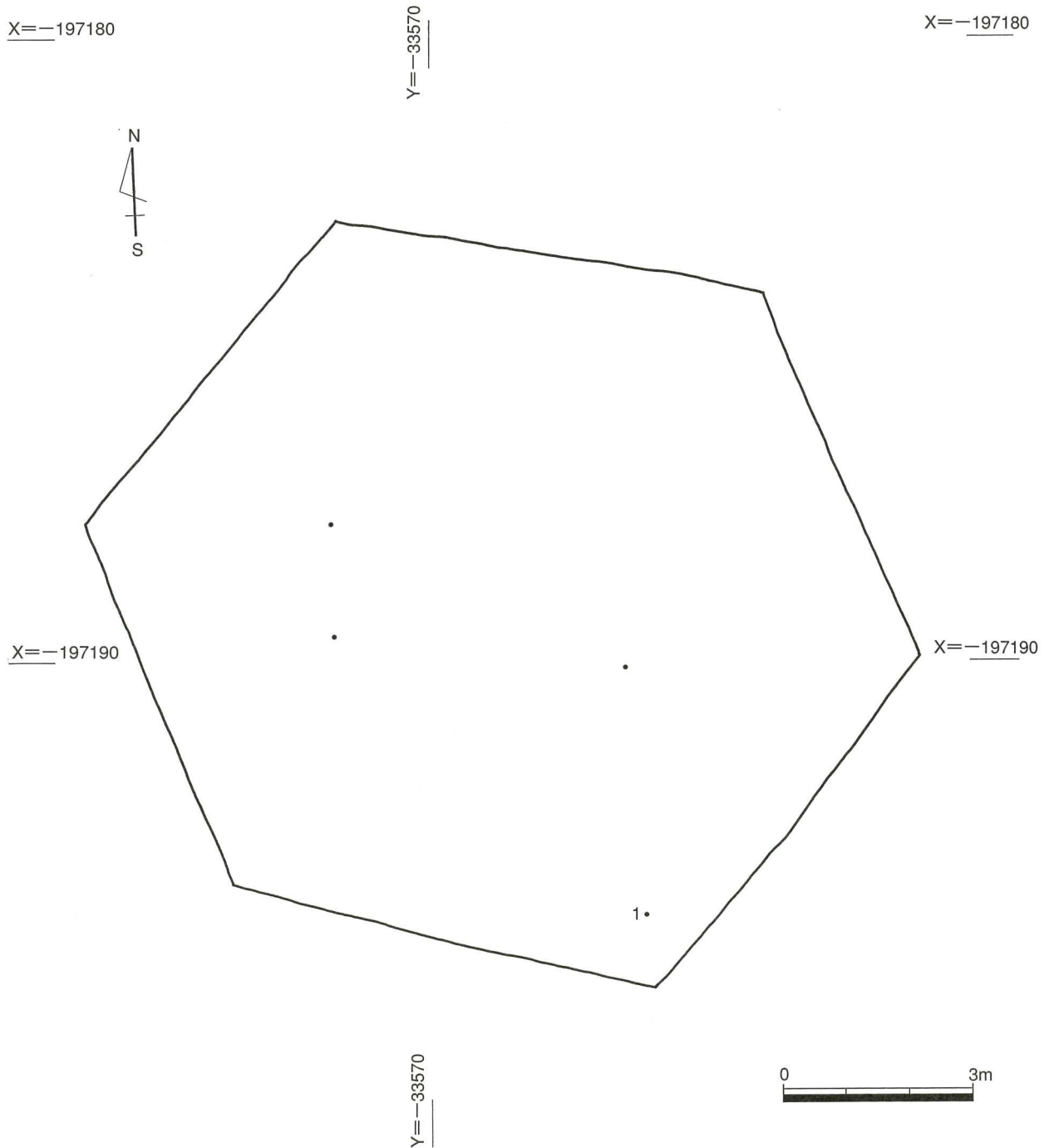
## 2. 遺物について

### (1) 第8層出土遺物 (第16図・第17図・第19図No.1)

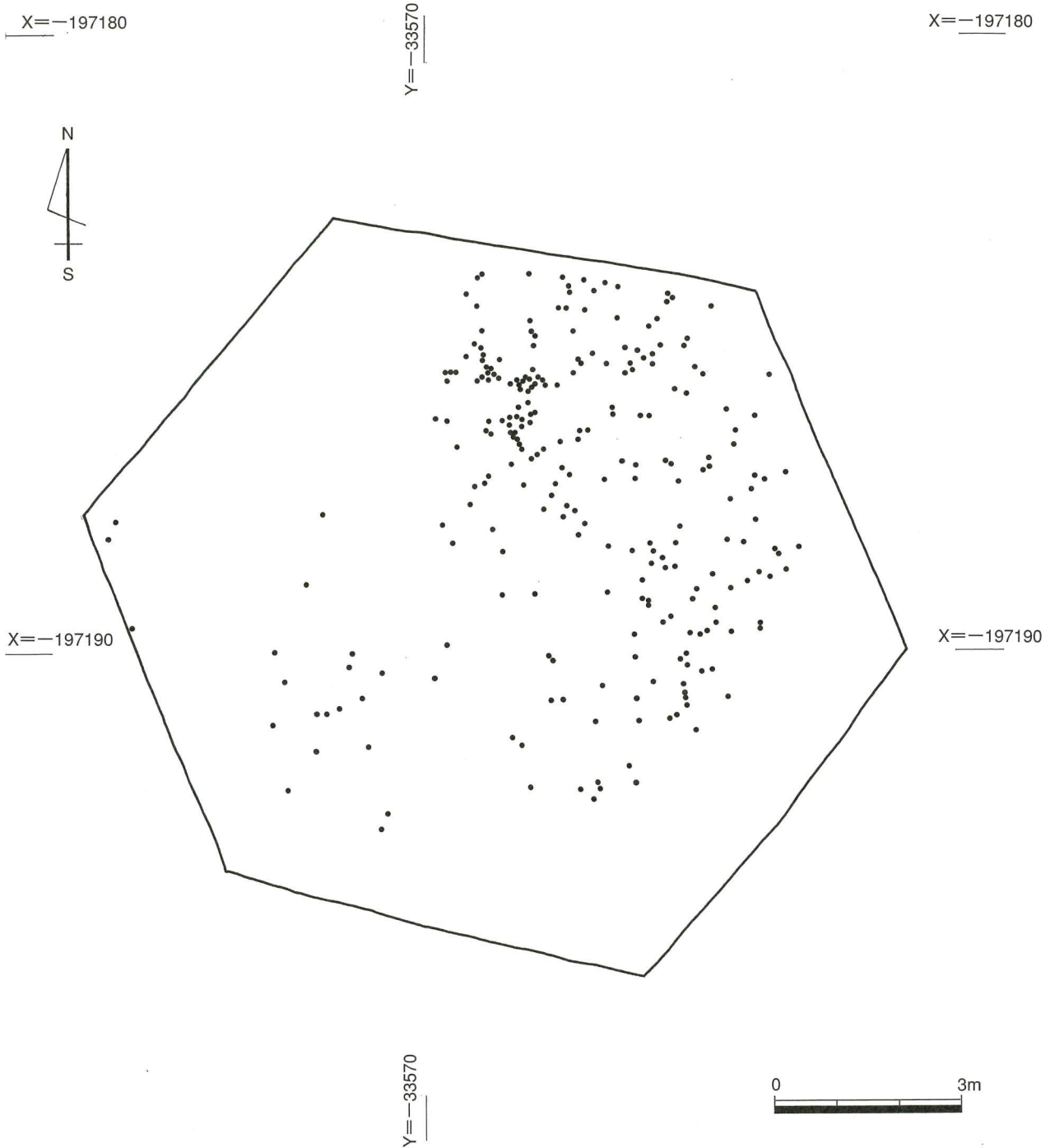
第8層は、周辺遺跡の調査成果では成川式土器を主体とする包含層であることが知られている。今回の調査では、土器片数点と軽石、大量の炭化物が出土した。

1は成川式土器壺の胴部を加工して作られた円盤状土製品である。長軸6.2cm、短軸5.5cmを測る。

第8層中の炭化物は、第17図に図示したように量が多いのが特徴である。調査地点の第8層は、層厚が10cm程度と薄く、青コラ前期ステージの火山礫も多量に含んでおり、炭化物の集積が長期間によるものとは考



第16図 古墳時代 (第8層中) 遺物出土状況図 (S=1/100)



第17図 第8層中炭化物出土状況図 (S= 1/100)

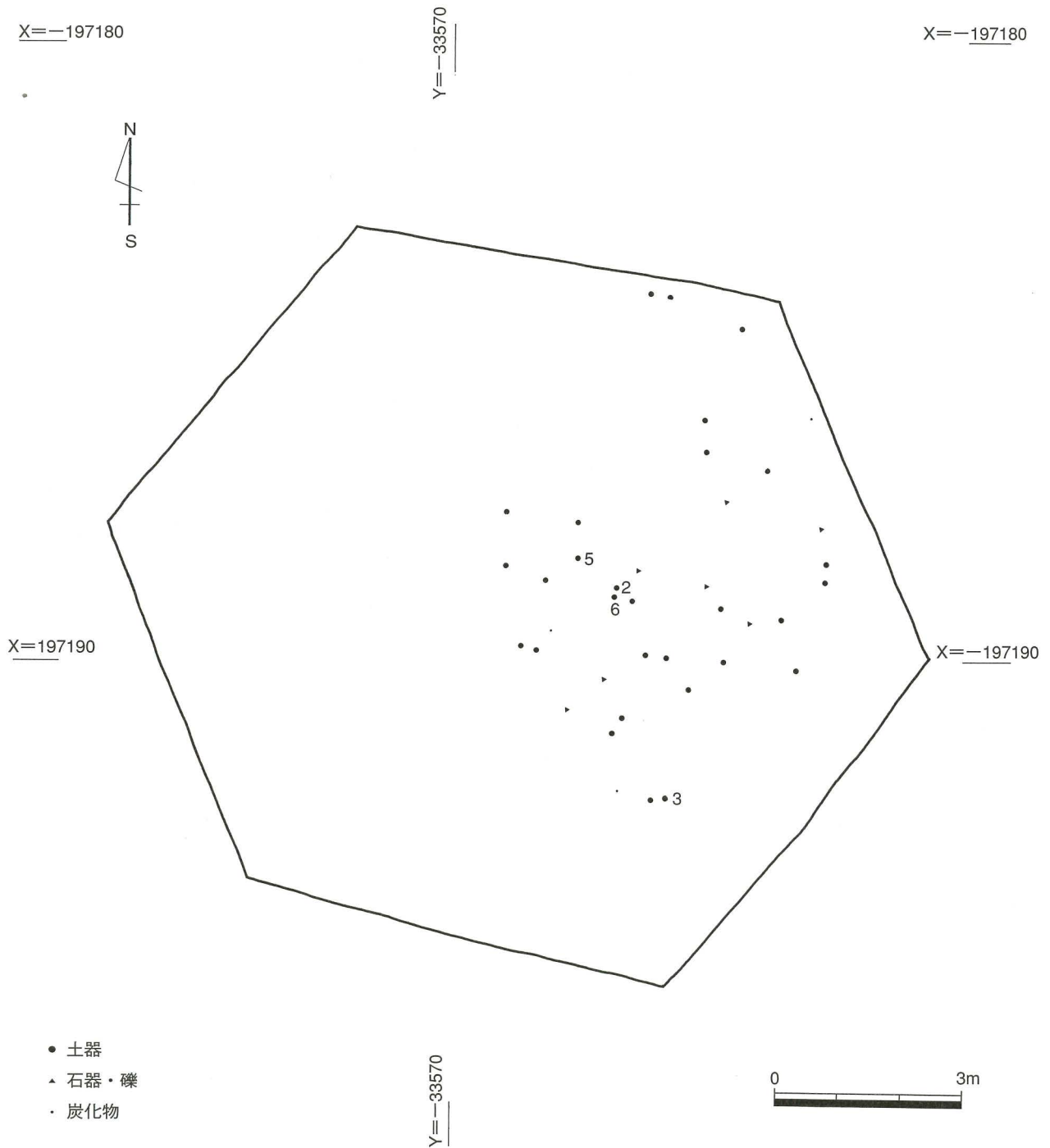
え難い。同時に、火山噴出物は降下時点で高温であったとは考えられていないため、火山灰の堆積によるものとも考えにくい。

また、炭化物は第8層中の一定レベルに集中しているものではなく、一度の火災などが成因とは思えない。このため、野焼きなどによるものという可能性も考えておきたい。

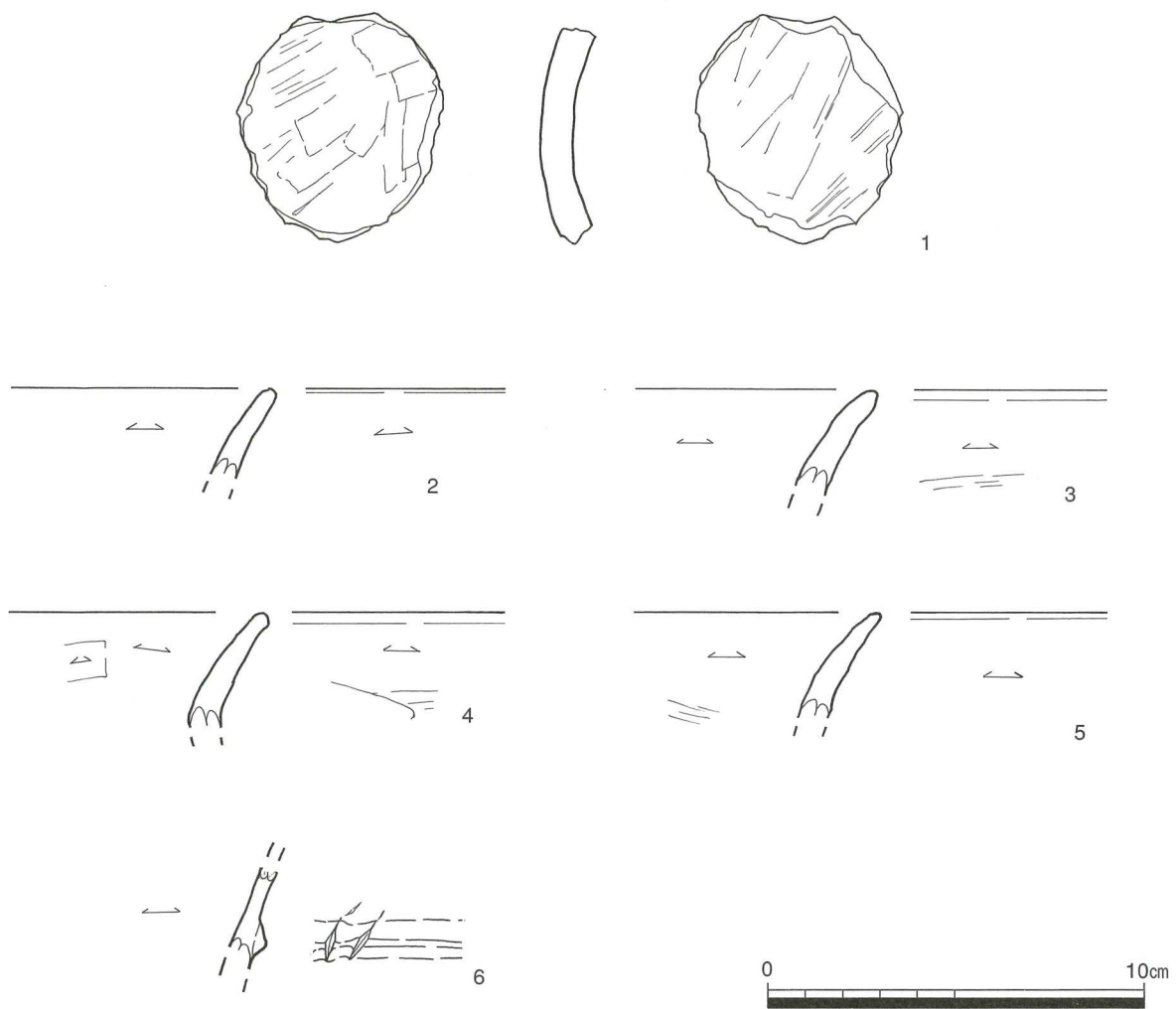
(2) 第9層出土遺物 (第18図・第19図No. 2 ~No. 6)

第8層同様、第9層も成川式土器を主体とする遺物包含層である。出土遺物は、成川式土器の甕を主体とする土器の他に、礫や炭化物があった。総点数39点のうち、口縁部など部位が明確な5点を図化し掲載した。

No. 2 は、甕形土器の口縁部の破片である。口唇部は丸みを帯びるが、端部はやや平坦になり、外反する。  
 No. 3 は、甕形土器の口縁部の破片である。口唇部は丸みを帯び、端部に至る。口縁部は外反する。  
 No. 4 は、甕形土器の胴部屈曲部分～口縁部の破片である。口唇部にかけ一旦くびれるが、口唇部がやや膨らみ丸みを帯びた形状となる。口縁部は外反する。  
 No. 5 は、甕形土器の口縁部の破片である。口唇部は丸みを帯び、端部に至る。口縁部は外反する。  
 No. 6 は、甕形土器の胴部片であり、刻み目突帯が施される部分である。突帯幅は 1 cm 程度であり、断面三角形となる。刻み目は幅 2 mm 程度に、ヘラ状工具によって、1 cm 以内の間隔で施されている。



第18図 古墳時代（第9層中）遺物出土状況図（S=1/100）



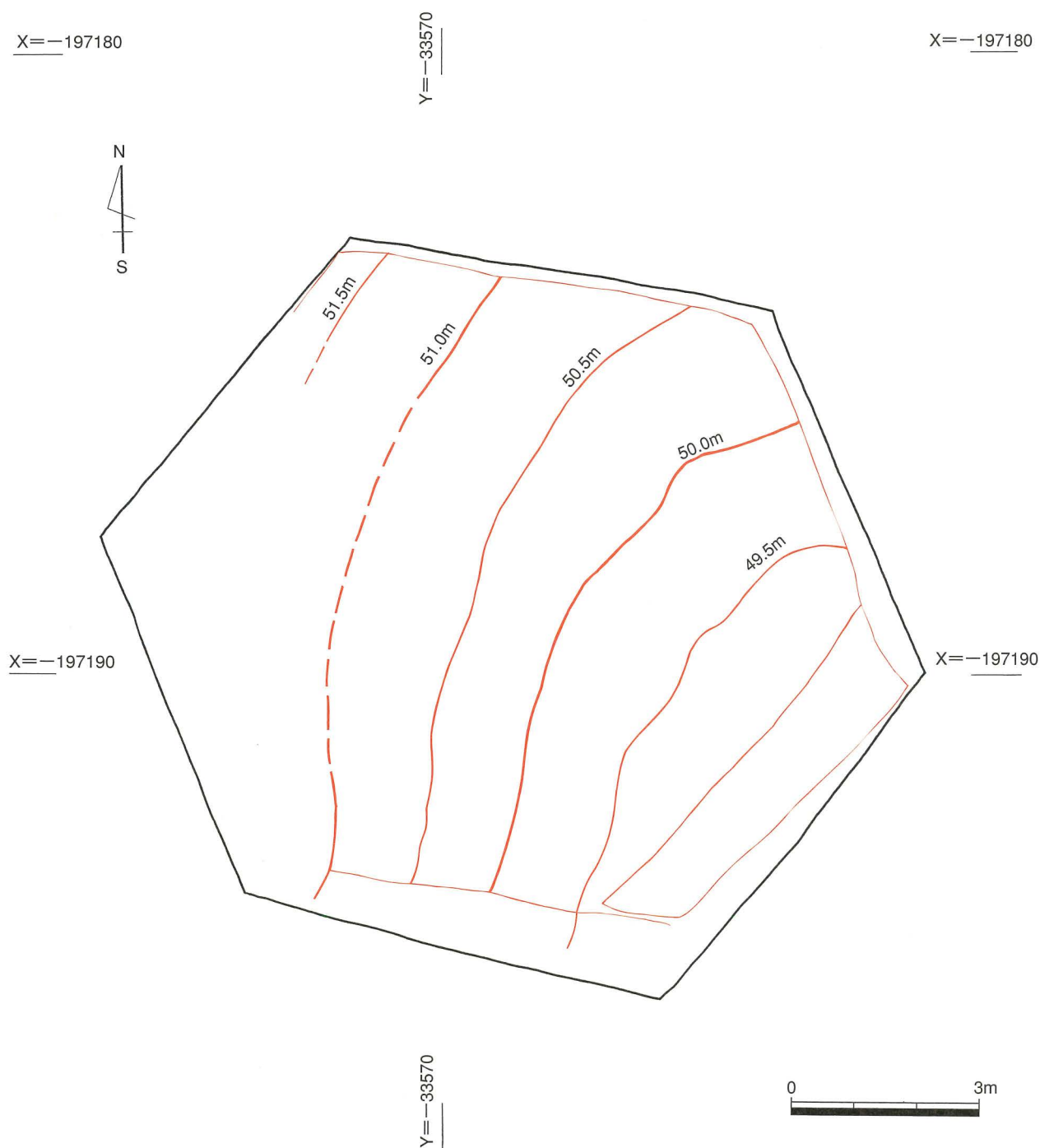
第19図 古墳時代（第8・9層中）出土遺物実測図（S=1/2）

### 第3節 弥生時代

#### 1. 暗紫コラ直下の地形について (第20図)

開聞岳火山灰によって被覆された各時期の地形変化を比較する為に、暗紫コラ（第11層）を除去し、第12層 a 上面の地形測量を行った。

コンターラインは南北に伸びており、北に向かってやや東よりに方向を変えている。青コラ下位の第9層上面では、コンターラインがU字を呈していたのとは異なり、暗紫コラ降下前段階では、東に向かった傾斜面で、地形の変化が後の時代に比べ緩やかであったことがわかる。



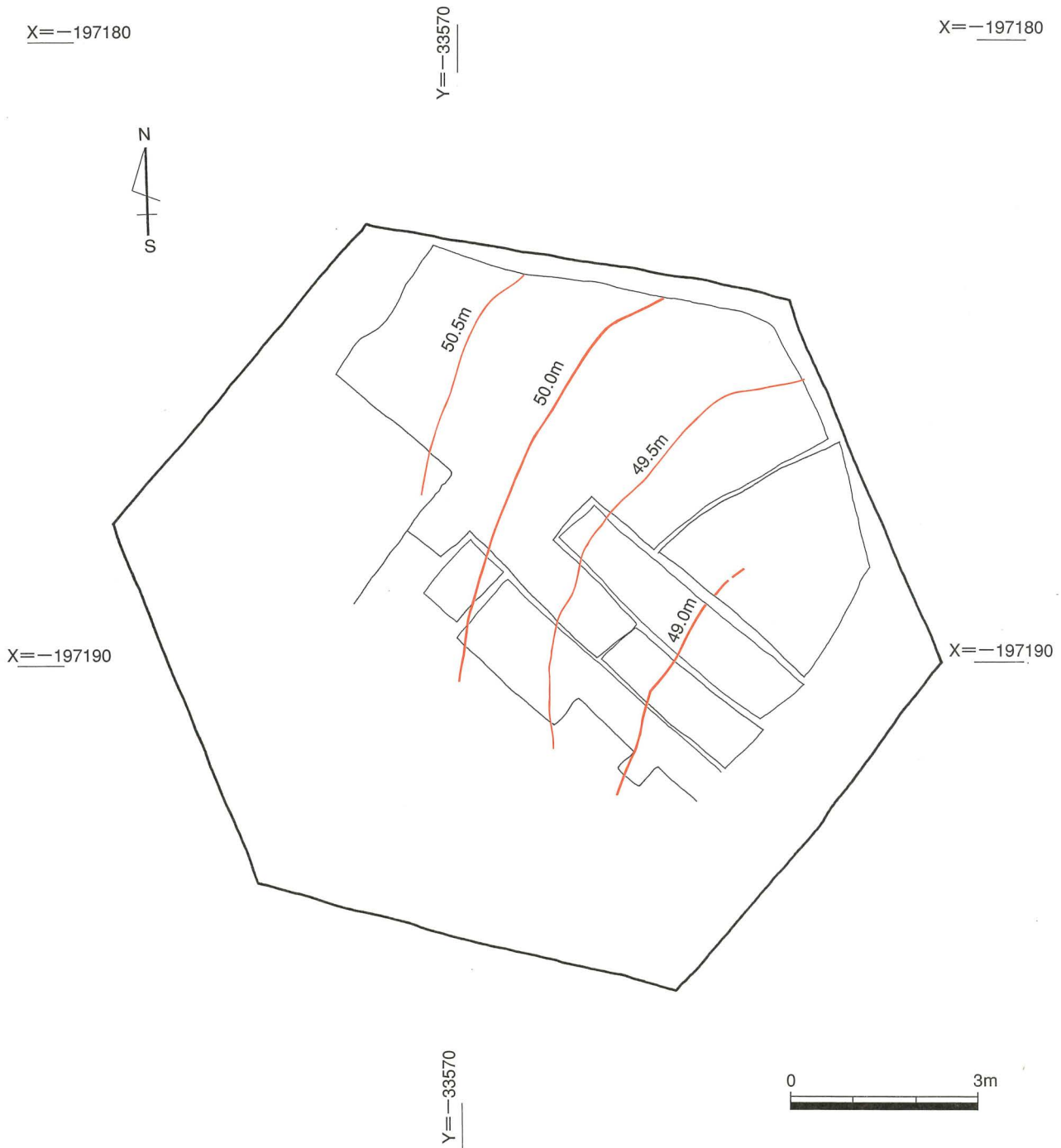
第20図 12層 a 上面 (暗紫コラ直下) の地形図 (S= 1 /100)



## 2. 弥生時代火山灰直下の地形について (第21図)

暗紫コラ下位の第12層中には、砂状の火山灰堆積層が見られる。開聞岳起源の噴出物km 7 またはkm 8 と考えられる火山灰層である。

調査区の掘削が規定深度を越えたため、全面で火山灰堆積層下の地形測量を実施していないが、地形測量図からの印象では上位の暗紫コラ直下の地形とよく似ている。すなわち、調査区一帯の地形変化は、暗紫コラ降下後、青コラ降下までの間に起ったことを示している。

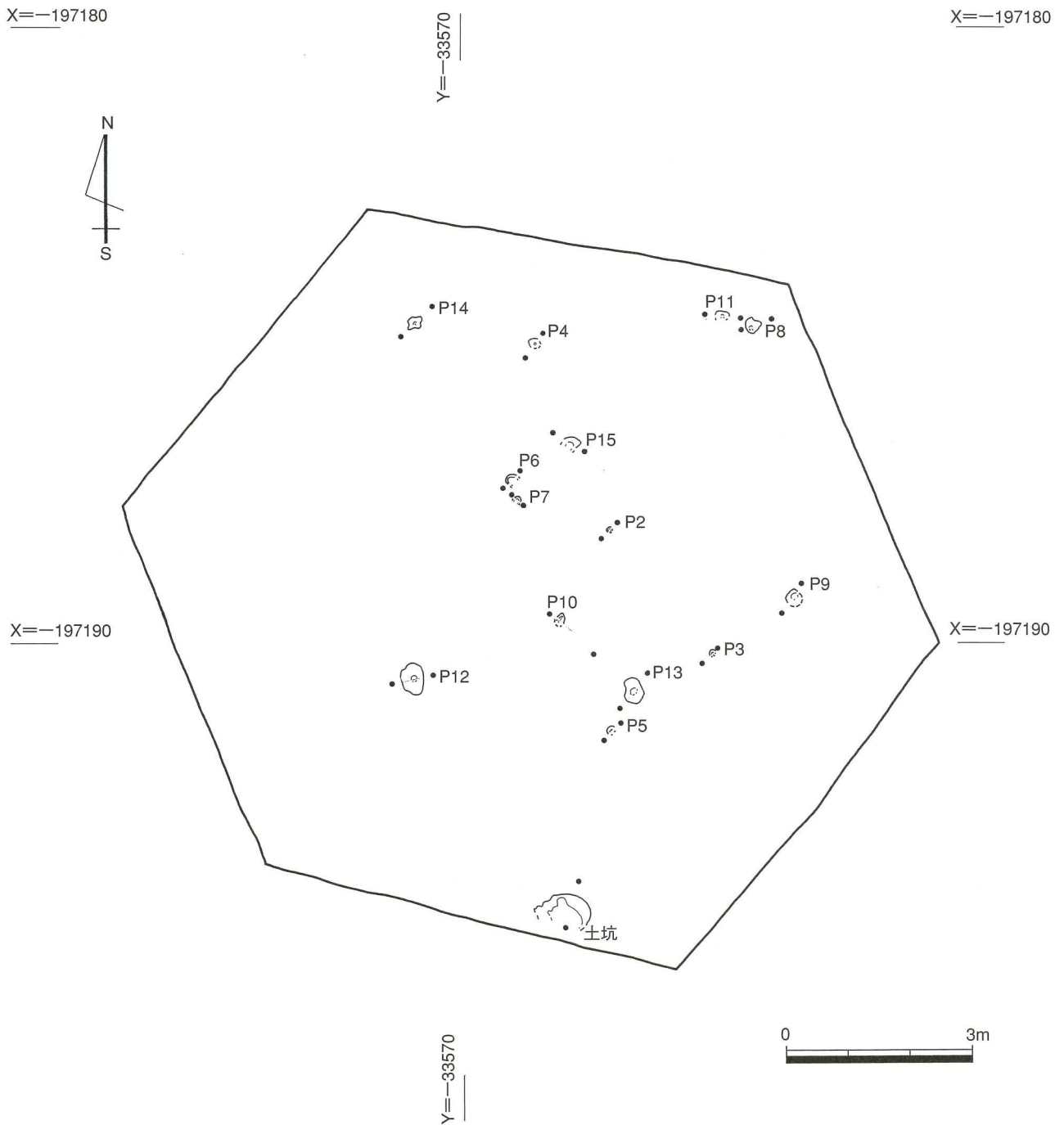


第21図 弥生時代火山灰 (km 7 またはkm 8) 直下の地形 (S= 1 /100)

## 2. 遺構について

弥生時代の遺構は、土坑1基、ピット17基である。11層暗紫コラ上面で検出された、10層を埋土とするものが大半であり、土坑1基とピット16基である。第12層b上面からの掘り込みであると判明しているのはピット18の1基である。

遺構の配置状況は、第22図のとおりである。ピットの配置からは、何らかの遺構を構成するとは考えられない。ピットの形状もまばらであり、規格性は見られない。ただ、全体の配置を見ると、大まかに地形傾斜に対して40度程度の角度をとった2列の配列を取る可能性もある。角度はやや異なるが、古代において南に向かう古道が検出されていることがそれを想起させる。



第22図 弥生時代遺構配置図 (S= 1 /100)

## 土坑（第24図）

調査区南端部の暗紫コラ上面で、第10層を埋土とする土坑を検出した。土坑の法量は、長軸92cm、検出された短軸44cm、深さが18cm程度を測る。調査区内におよそ半分がかかっていたことから、円形に近い形状の土坑であると考えられる。立ち上がり部分は、暗紫コラを2段掘りし、底部に直径15cm程度の楕円の窪みを持つ。埋土は10層土に近いが、やや明るい土色を呈する。土坑中央部分に暗灰色土が薄く堆積しており、埋土が2分層できる。土坑の形状からは用途は不明である。土坑の設けられた箇所は、東向きのかかなりの傾斜地である。

なお、中央ベルトの断面において、断面形が逆台形に近い落ち込みが2箇所見られている。中央ベルトの除去作業時に第11層上面での検出を試みたが、平面形状が明瞭に捉えられなかった。土坑であれば、第10層を埋土とするものである。

## ピット（第23図・第24図）

第11層暗紫コラ上面で第10層土が落ち込んだ部分を多数検出したため、適宜先行トレンチを設置、半裁しピットか否かを確認したところ、第10層を埋土とするピットを16基（ピット2～ピット17）、第12層aを埋土とするピットを1基（ピット18）検出した。

また、東壁セクションにおいて、第12層a上面から第12層bに向かって掘り込んだピット18を検出した。ピット18は第12層aを埋土とする。

ピット2は、長軸10cm強、短軸10cmの略円形を呈し、断面形は尖底に近い形状を呈する。検出面からの深さは14cmを測る。

ピット3は、長軸12cm、短軸7cmの略円形を呈し、断面形は細長く、底部が丸く収まる形状を呈する。底部に樹根がかんでいる。検出面からの深さは24cmを測る。

ピット4は、長軸19cm、短軸16cmの略円形を呈し、断面形は2段掘りとなっており、底は尖る。検出面からの深さは29cmを測る。

ピット5は、長軸14cm、短軸14cmの略円形を呈し、断面形は細長い台形を呈する。底部に樹根がかんでいる。検出面からの深さは16cmを測る。

ピット6は、中央ベルト断面で検出し、残っていた底部を確認した。断面では口径24cmを測り、断面形は2段掘りとなっており、底は丸く収まる形状を呈する。埋土上半は暗紫コラの礫が混じり、暗紫コラのブロックも入り込んでいる。検出面からの深さは39cmを測る。

ピット7は、直径21cmの略円形を呈し、断面形は皿状を呈する。検出面からの深さは6cmを測る。

ピット8は、長軸23cm、短軸23cmの略円形を呈し、断面形は尖底に近い形状を呈する。検出面からの深さは12cmを測る。

ピット9は、直径27cmの隅丸方形を呈し、断面形は丸底に近い形状を呈する。検出面からの深さは17cmを測る。

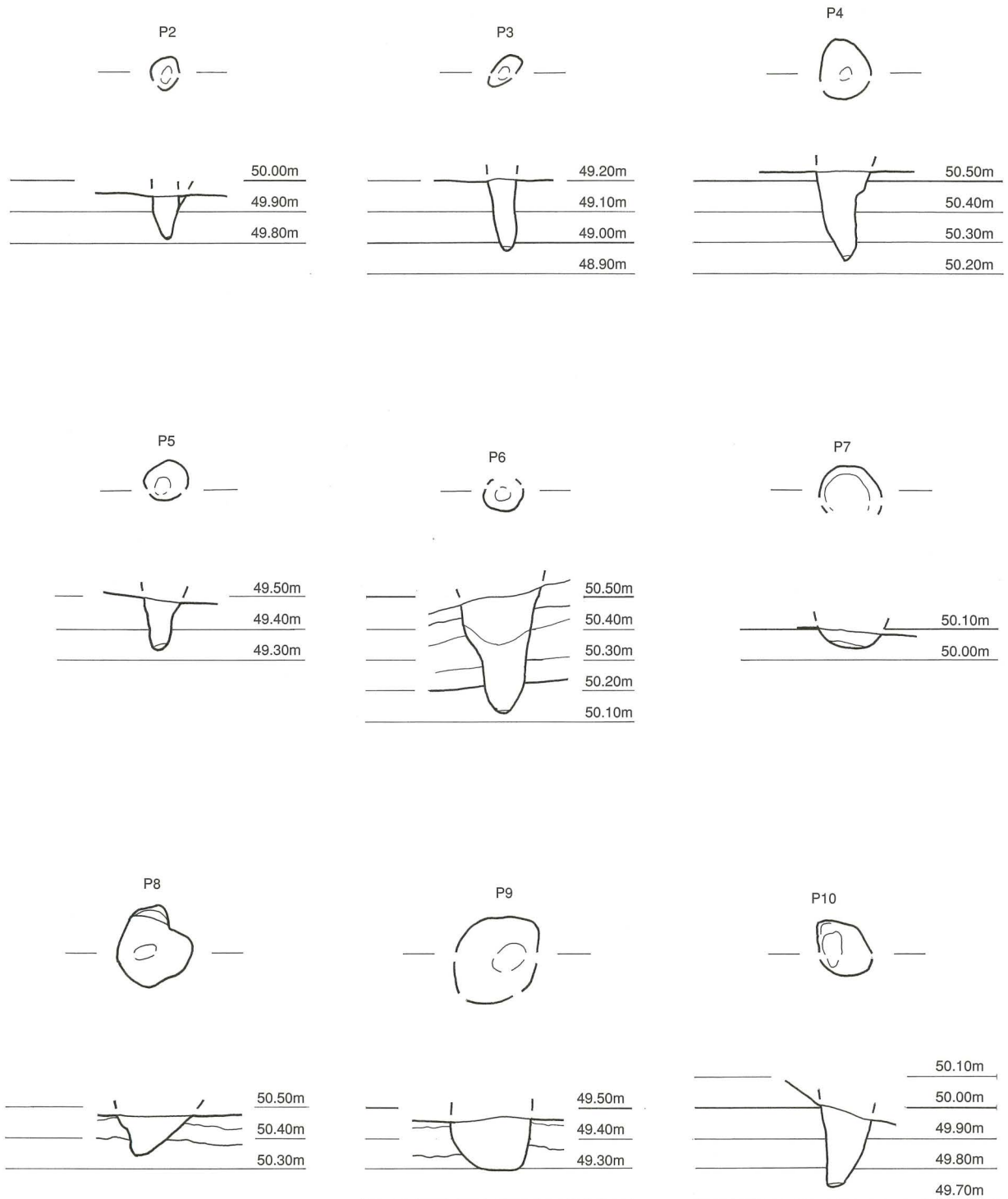
ピット10は、長軸22cm、短軸15cmの略楕円形を呈し、断面形は底部径の小さい逆台形を呈する。検出面からの深さは25cmを測る。

ピット11は、直径21cmの隅丸方形を呈し、断面形は尖底に近い形状を呈する。検出面からの深さは23cmを測る。

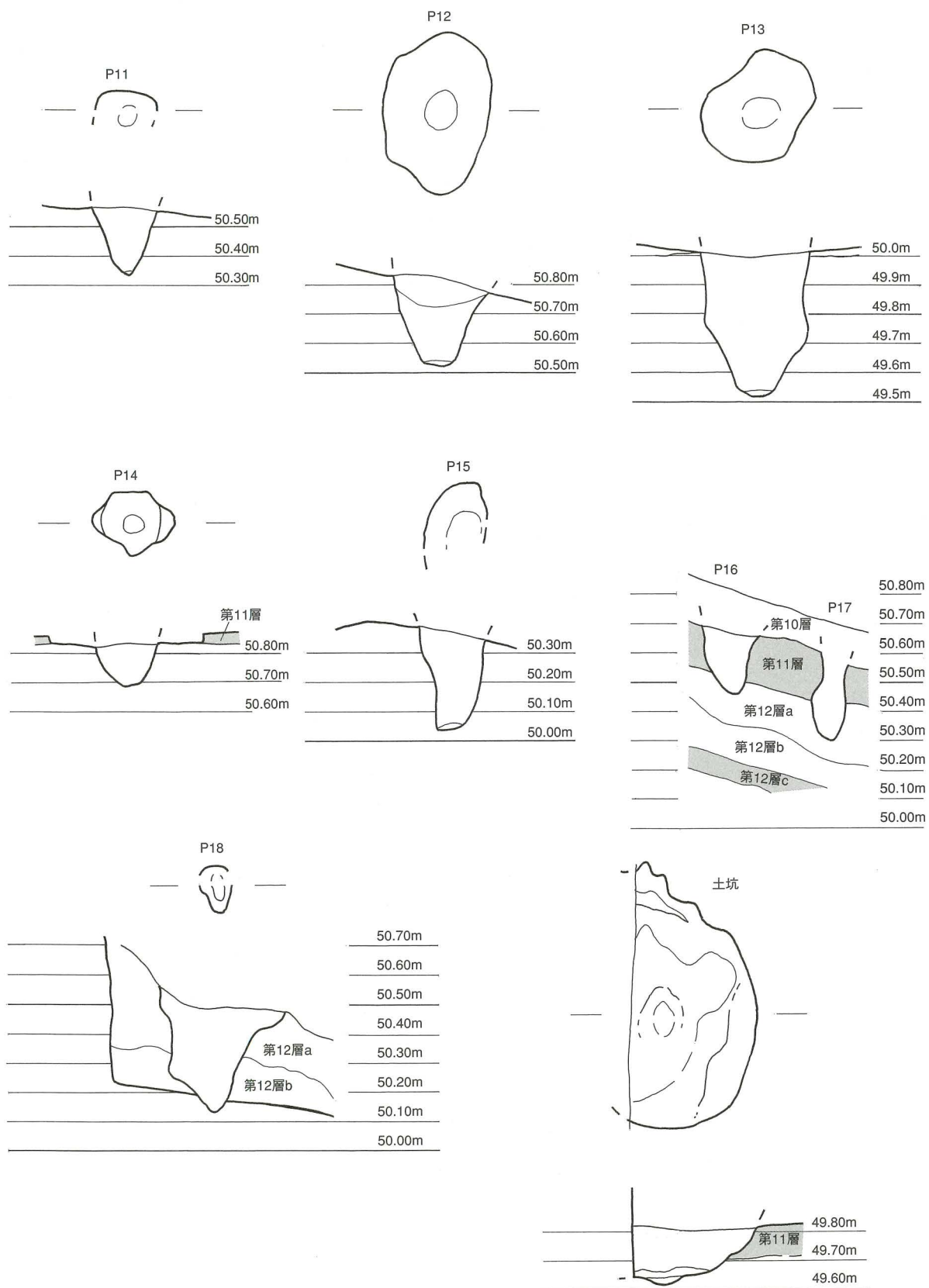
ピット12は、長軸56cm、短軸38cmの楕円形を呈し、断面形は逆台形を呈する。検出面からの深さは31cmを測る。埋土は2層に細分でき、上半は第10層土、下半は第12層土がこれに混入した土壌となる。

ピット13は、長軸40cm、短軸34cmの不整形を呈し、断面形は上半が垂直に落ち、下半が窄まる丸底を呈する。検出面からの深さは47cmを測る。

ピット14は、長軸28cm、短軸21cmの楕円形を呈し、断面形は丸底に近い形状を呈する。検出面からの深さは



第23図 弥生時代ピット平面図・断面図 (S= 1 /20)



第24図 弥生時代ピット平面図・断面図、土坑実測図 (S= 1/20)

は15cmを測る。

ピット15は、短軸22cmの楕円形を呈し、断面形は段を有し窄まる平底を呈する。検出面からの深さは32cmを測る。

ピット16は、中央ベルト断面で検出した。口径18cmを測り、断面形は尖底に近い形状を呈する。検出面からの深さは20cmを測る。

ピット17は、中央ベルト断面で検出した。口径9cmを測り、断面形は途中袋状に広がる尖底に近い形状を呈する。検出面からの深さは27cmを測る。

ピット18は、東壁断面で検出した。埋土が口径42cmを測り、断面形は段を有し、底部でもう一段落ち尖底となる形状を呈する。検出面からの深さは36cmを測る。

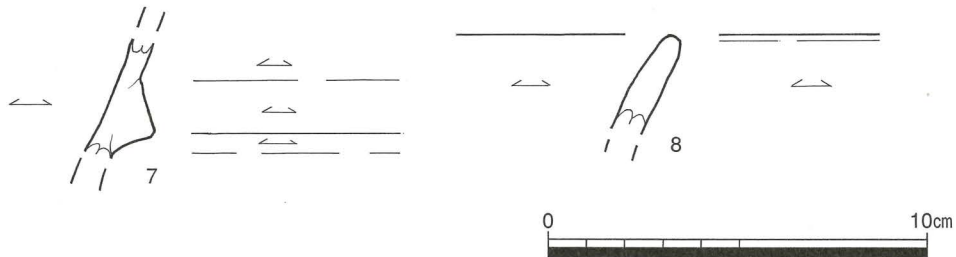
### 3. 遺物について

第10層、第12層は弥生時代の遺物包含層である。出土遺物は、土器・石器・骨片など10点であり、口縁部など、部位が明瞭なもの5点を図化した。以下、層位ごとに記述する。

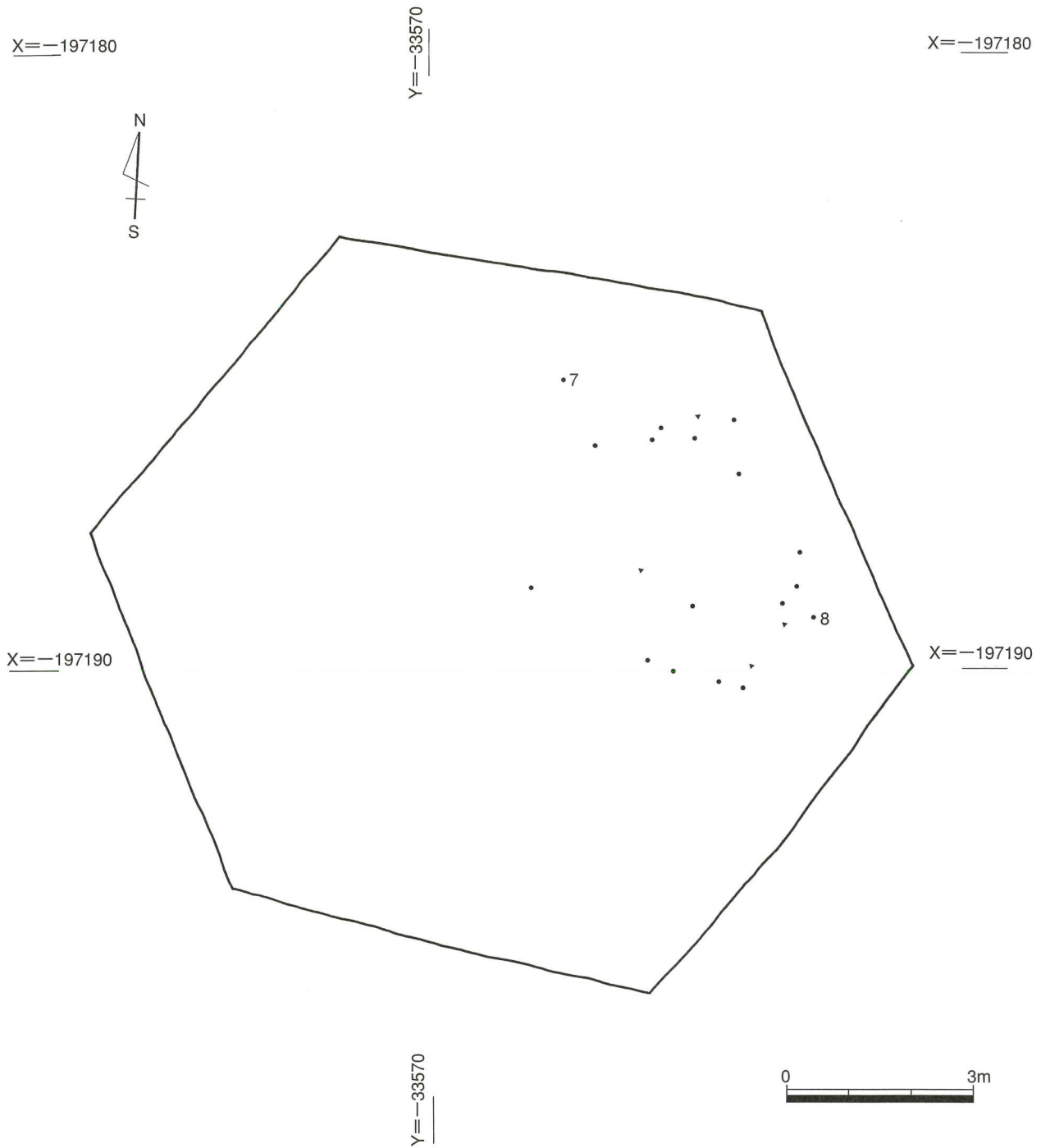
#### (1) 第10層出土遺物 (第25図、No.7・No.8)

No.7は、甕形土器の胴部、突帯部の破片である。突帯の断面形は三角形であり、突帯の幅は2.2cmを測る。刻みは施されない。

No.8は、甕形土器の口縁部の破片である。口唇部は丸みを帯び、端部に至る。口縁部は外反する。



第25図 弥生時代(第10層)出土遺物実測図(S=1/2)



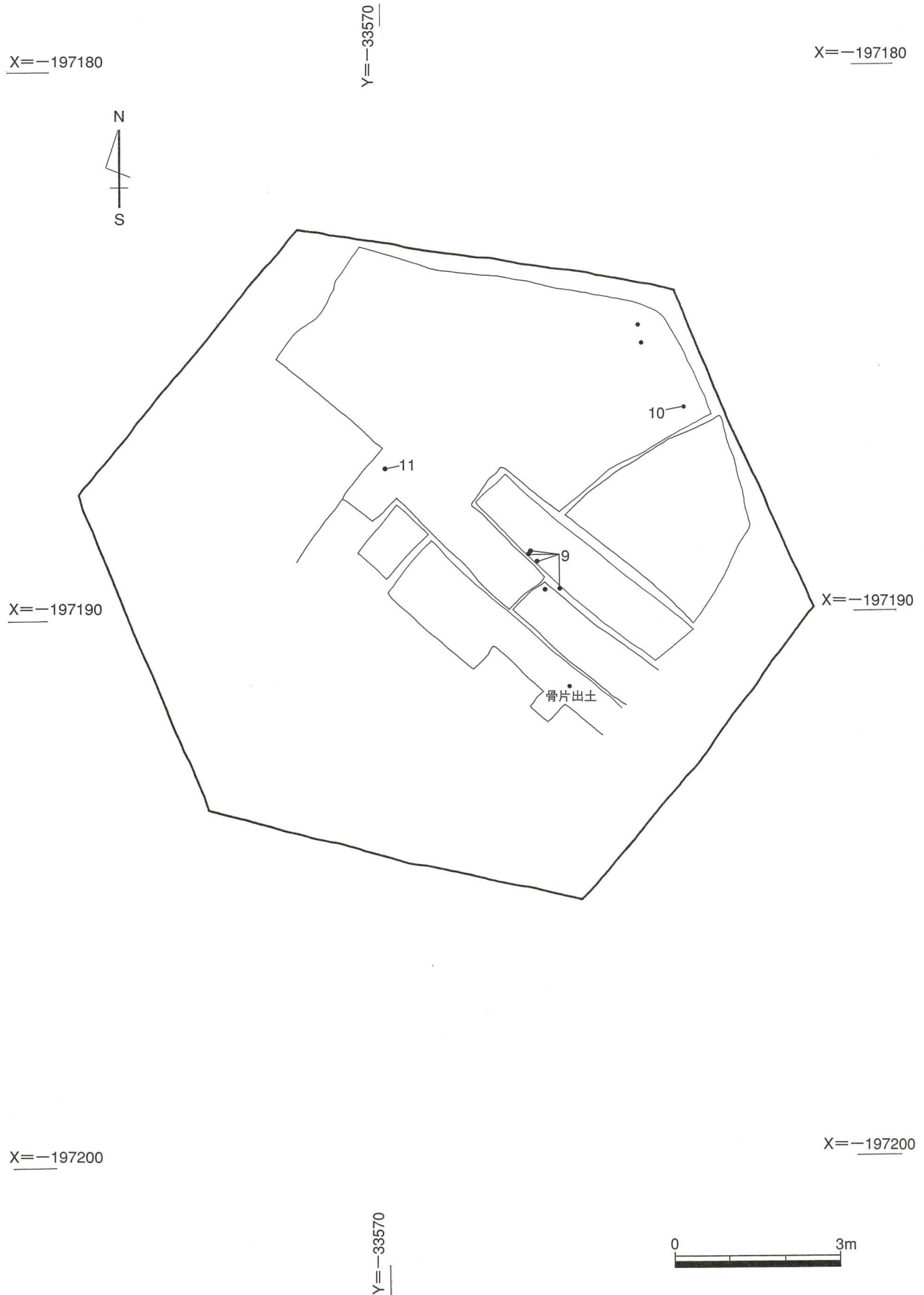
第26図 弥生時代（第10層中）遺物出土状況図（S= 1/100）

(2) 第12層出土遺物（第27図・第28図No. 9～No.11）

No. 9 は、壺形土器の頸部から胴部にかけての破片である。肩部に二重沈線を施す。胴部は丸く張り、口縁部に向かって頸部が締まる形態を呈する。外面はナデ仕上げであり、ミガキは施さない。第12層 b からの出土である。肩部から頸部へのラインは、斜めに上り緩やかに締まること、三角突帯を持たないなどの特徴から、入来Ⅱ式土器の範疇に入るものと考えられる。

No. 10 は、甕形土器の口縁部の破片である。口唇部には平坦面を作り出し、沈線を一条施す。沈線は押し引きにより施文されており、沈線内に刺突が見られる。口縁部は外反する。第12層 b からの出土である。

No. 11は、凹石である。最大径8.4cm、厚さ3.8cmの円礫を素材としている。表裏両面に凹部が2箇所ある。また、表面の凹部の周囲は磨面となっている。また、裏面の凹部の周囲も表面と比較して面積は狭いが、磨

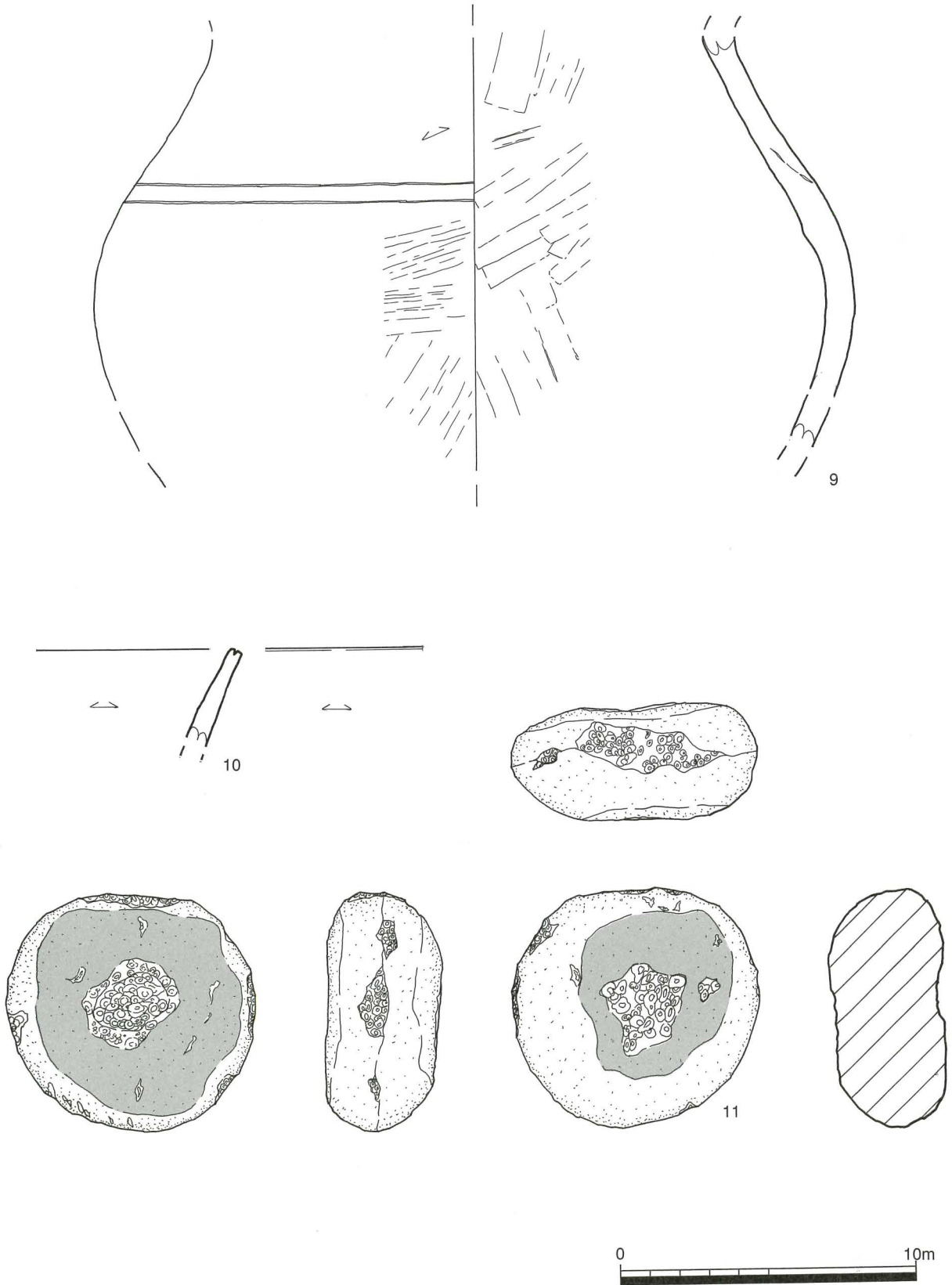


第27図 弥生時代（第12層中）遺物出土状況図（S= 1/100）

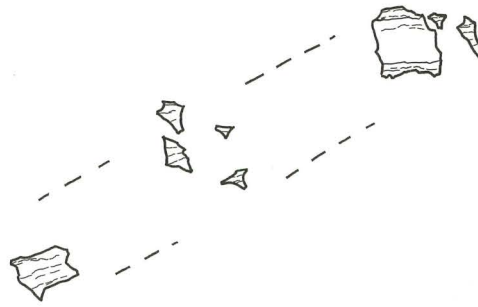


面となっている。側面には2箇所の明確な打面が残る。その他、側面に敲打痕が数箇所残っている。第12層dの出土である。

なお、第12層b中に骨片と見られる遺物の出土があった。極めて脆く、ボロボロの状態であった。骨片と考えられるものの、残存法量は長さ6 cm程度、幅最大1 cm程度である。数個の骨片が点在する状況であり、本来の形状は不明である。



第28図 弥生時代（第12層）出土遺物実測図（S=1/2）



第29図 弥生時代（第12層 b）出土骨片実測図（S=1/10）

表 8 遺物観察表

図No	取上げNo	層位	種別	機種	残存法量 (cm)	部位	色外	色内	色肉	色他	胎土粒	混和材	調整	その他	同一
1	43	8	土製品	円盤状 土製品	長軸6.2・ 短軸5.5	-	2.5YR5/4	5YR5/4	5YR4/3	-	細砂粒を 多く含む	カ・セ・ 白・黒	内：ナデ 外：ナデ	成川式 土器壺 の転用 品	
2	134	9	土器	甕	破片	口縁部	7.5YR4/1	7.5YR5/4	10YR4/3	-	細砂粒を 多く含む	カ・セ・ 白・黒	内：ヨコ ナデ 外：ヨコ ナデ	焼成良 好・傾 きギモ ン	
3	112	9	土器	甕	破片	口縁部	7.5YR5/4	5YR5/4	10YR4/3	-	細砂粒を 多く含む	カ・セ・ 白・黒	内：ヨコ ナデ 外：ヨコ ナデ	焼成良 好・傾 きギモ ン	
4	一般	9	土器	甕	破片	口縁部	10YR4/1	5YR5/4	10YR4/2	-	細砂粒を 多く含む	カ・セ・ 白・黒	内：ヨコ ナデ 外：ヨコ ナデ	焼成良 好・傾 きギモ ン	
5	136	9	土器	甕	破片	口縁部	5YR3/1	5YR5/4	7.5YR4/2	-	細砂粒を 多く含む	カ・セ・ 白・黒	内：ヨコ ナデ 外：ヨコ ナデ	焼成良 好・傾 きギモ ン	
6	135	9	土器	甕	破片	胴部・ 突帯部	5YR4/2	2.5YR4/2	5YR4/2	-	細砂粒を 多く含む	カ・セ・ 白・黒	内：ナデ 外：刻目 突帯・ ナデ	焼成良 好・傾 きギモ ン	
7	140	10	土器	甕	破片	胴部・ 突帯部	5YR4/3	10YR3/1	7.5YR4/2	-	微砂粒を 多く含む	カ・セ・ 白・黒	内：ヨコナデ 外：突帯・ ヨコナデ	焼成良 好・傾 きギモ ン	
8	152	10	土器	甕	破片	口縁部	2.5YR4/1	N3/0	7.5YR4/2	-	細砂粒を 多く含む	カ・セ・ 白・黒	内：ヨコナデ 外：ヨコナデ	焼成良 好・傾 きギモ ン	
9	158	12b	土器	壺	1/6程度	胴部	7.5YR4/1	7.5YR4/2	10YR4/2	-	微砂粒を 含む	カ・セ・ 白・黒	内：工具によ るナデ 外：二重沈線 ・ナデ	焼成 良好	159 160 161
10	164	12	土器	甕	破片	口縁部	7.5YR4/1	7.5YR5/4	10YR6/4	-	微砂粒を 多く含む	カ・セ・ 白・黒	内：ナデ 外：ナデ	焼成良 好・傾 きギモ ン	
図No	取上げNo	層位	種別	機種	法量(cm)	部位	色外	色内	色肉	色他	石材	混和材	調整	その他	同一
11	171	12d	石器	凹石	長軸9.5・ 短軸8.1・ 厚 3.9						安山岩				

## 第4章 まとめ

### 弥生時代

弥生時代の遺物包含層は、暗紫コラとその下位の火山灰層（km7 またはkm8）の上下にある第10層と第12層である。全体的な遺物の出土量は第10層が多く、ピットも第10層に帰属するものが大部分であり、平成18年度調査区とは様相を異にする。平成18年度の遺物・遺構は今調査区で言う第12層cの火山灰前後に集中していた。立地的に平成18年度調査区は、今年度調査区が所在する丘陵の北側にある谷地形であった。今調査区は約50m南西に行った丘陵南側である。平成18年度の調査で大量に出土した入来Ⅱ式期の遺物から、丘陵上の平坦面を中心として、同時期の集落があったことが想定された。今調査区では遺物の出土量は少ないものの、ピットや土坑が造営されるなど、暗紫コラ降下後に人間の活動があったことを示している。

ピットに関しては、配置的に建物などの可能性は棄却される。平成18年度の調査で、入来Ⅱ式の時期のピットが丘陵上部に向かって並んでいるものが検出された。このピット列の性格について、集落へのゲートなどの可能性が指摘されている。今回の調査区が手狭であり、全体の状況は把握できていない。しかし、古代に見られた海岸へ伸びると考えられる道の存在が、弥生時代において全く無かったとも言い切れないだろう。

新番所後遺跡の調査は今回で3回目になるが、弥生時代の生活拠点とみられる丘陵頂部での本格的な調査はまだ行われていないため、遺跡自体の性格や集落中心部分の位置、集落の規模など不明な点が多い。調査は端緒に付いたばかりである。

### 古墳時代

調査区一帯は、古墳時代において地形の侵食が進み、丘陵のこの部分が括れたようである。現在の地形は、調査地点でもっとも丘陵が狭くなり、東に向かい再び丘陵の幅が広がっている。各時代の地形測量の結果では、このような地形は古墳時代に生成され、現在にまで受け継がれたものだと考えられる。

### 古代

橋牟礼川遺跡においては、西暦874年の開聞岳火山灰（紫コラ）直下に、畠跡が広く分布している。このような状況は、向吉遺跡・中小路遺跡・小田遺跡・南迫田遺跡など、新番所後遺跡の北側一帯に広く見られる。これは、西暦800年に南九州で完全施行された班田制の下、強力に推し進められた結果と考えられる。今回の調査区においては、第6層中に道跡と考えられる硬化面が帯状に伸びていた。その配置から、丘陵上から南の海岸へ伸びる道と考えられるため、丘陵上には何らかの集落が存在した可能性が伺える。

ただ、平成18年度の調査においても、今回の調査においても、耕作地らしき遺構が発見されていない。また、平成6年度に北東約400mの牟礼瀬遺跡において、下水道事業に伴う確認調査を実施した。現地は、今調査地点とは異なり緩やかな平坦地が広がる地点に位置しているおり、耕作適地と思われるが、紫コラ直下などに畠遺構が発見されていない。新番所後遺跡一帯ではどのような生産がどこで行われていたかは不明である。

写真図版



写真1 指宿市全景



写真2 東壁層位



写真3 南東壁上段層位



写真4 南東壁下段層位



写真5 南壁層位



写真6 中央ベルト層位

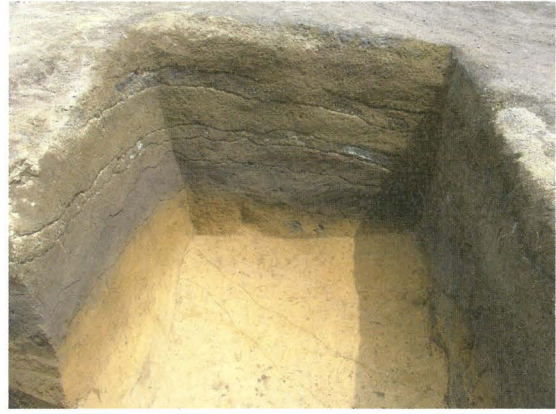


写真7 先行トレンチ層位



写真8 古代遺構面調査状況



写真9 古道検出状況



写真10 硬化面1



写真11 硬化面1断面



写真12 硬化面2



写真13 硬化面2断面



写真14 硬化面 3



写真15 硬化面 3 断面



写真16 硬化面 4



写真17 硬化面 4 断面



写真18 硬化面 5

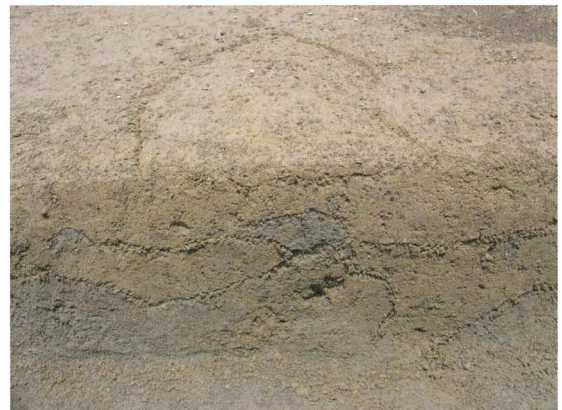


写真19 硬化面 5 断面



写真20 硬化面 6



写真21 硬化面 6 断面



写真22 古代ピット1



写真23 古墳時代（第9層）遺物出土状況



写真24 古墳時代（第8層）炭化物出土状況



写真25 弥生時代包含層調査状況

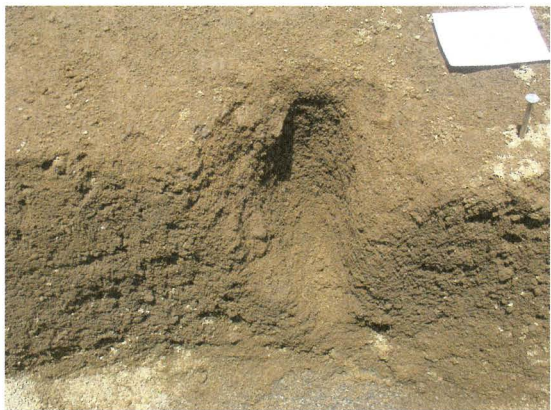


写真26 弥生時代ピット2



写真27 弥生時代ピット3



写真28 弥生時代ピット4



写真29 弥生時代ピット5



写真30 弥生時代ピット6



写真31 弥生時代ピット7



写真32 弥生時代ピット12



写真33 弥生時代ピット13



写真34 弥生時代ピット14



写真35 弥生時代ピット15

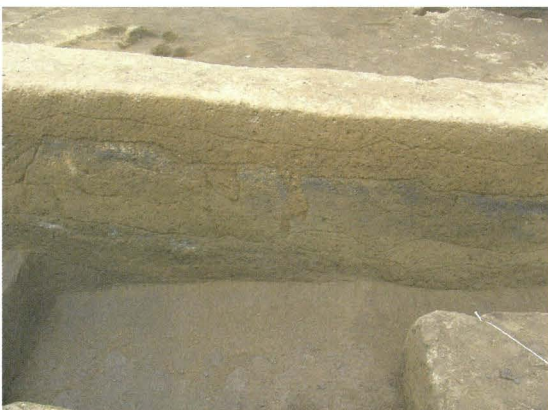


写真36 弥生時代ピット16・17



写真37 弥生時代ピット18





写真38 弥生時代土坑検出状況



写真39 弥生時代土坑断面



写真40 弥生時代土坑完掘状況



写真41 弥生時代(第10層)遺物出土状況



写真42 弥生時代(第12層 d)遺物出土状況



写真43 完掘全景



写真44 試掘トレンチ 1



写真45 試掘トレンチ 2



写真46



写真47



写真48



写真49



写真50

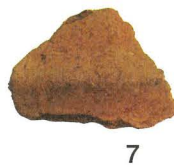


写真51

古墳時代（第8層・第9層）出土遺物



写真52



7



8

写真53

弥生時代（第10層）出土遺物



写真54



10

写真55

弥生時代（第12層）出土遺物



11

写真56

表2 報告書抄録

ふりがな	しんばんしょうしろ							
書名	株式会社エヌ・ティ・ティ・ドコモ九州携帯電話無線基地局建設に伴う発掘調査報告書 新番所後遺跡Ⅱ							
副書名	-							
巻次	-							
シリーズ名	指宿市埋蔵文化財発掘調査報告書							
シリーズ番号	第42集							
編著者名	中摩 浩太郎							
編集機関	鹿児島県指宿市教育委員会（指宿市考古博物館 時遊館COCCOはしむれ）							
所在地	〒891-0403 鹿児島県指宿市十二町2290 TEL：0993-23-5100							
発行年月日	平成19年9月28日							
所収遺跡名	所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
		市町村	遺跡番号					
新番所後遺跡	指宿市十二町字	46210	2-58			2007.4.2 } 2007.5.22	96㎡	建設
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項			
新番所後遺跡	散布地	弥生時代  古墳時代  古代	ピット群 土坑  道跡・ピット	入来式土器・ 凹石  成川式土器				

---

---

## 新番所後遺跡Ⅱ

Shinbansyoushiro Archaeological Site Ⅱ

2007年 9 月

2007 September

発 行

指宿市教育委員会

The Ibusuki Board of Education

鹿児島県指宿市十二町2290

Junicho 2290 Ibusuki-city, Kagoshima Pref. Japan

TEL 0993-23-5100

印刷所

株式会社 朝日印刷

Asahi Printing Co.

鹿児島市上荒田町854-1

Uearata-cho 854-1 Kagoshima-city, Kagoshima Pref. Japan

TEL 099-251-2191

---

---

新番所後遺跡Ⅱ正誤表

頁	行	誤	正
4	一	1 トレンチ断面 略図（東面） (S=1/80)	1 トレンチ断面 略図（東面） (S=1/40)
14	3	新藩所後遺跡	新番所後遺跡



